

治外法權ノ弊益々膏盲ニ浸入シ、終ニ救済スベカラザルニ至ラントス。誠ニ寒心セズンバアルベカラザル也。三良曾テ聞ク、寡ヲ以テ能ク衆ニ敵スル者ハ其術敵勢ヲシテ分離セシムルニ在リト、未ダ敵勢ヲシテ合從セシムルノ得策タルヲ聞ザル也。在昔嬴秦ノ六國ニ於ルヤ、常ニ其合從ヲ解クヲ以テ術ト爲ス、六國ハ即合從ヲ以テ利ト爲ス、故ニ合從スレバ則強秦トイヘドモ之ヲ如何トモスルコトナシ。蓋シ之ヲ分離スルノ策惟其利害ヲシテ各々異ナラシムルニ在ルノミ。利害之存スル所ハ乃チ去就ノ判ル、所、是勢ノ常情ナリ。異ナル哉我各國ニ對スルノ政略ヤ、其策常ニ同一ノ方法ヲ以テ同時ニ攻撃ヲ各國ニ試ム。是レ管ニ彼レノ利害ヲシテ相因ラシムルノミナラズ、益々其勢ヲ合從シテ以テ我ヲ待ツアルノミ。既ニ衆寡難從ノ數ニ背キ、又利害去就ノ勢ニ反ス、區々タル公法獨立ノ理義ヲ説モ亦何ノ益カ之アラム。苟モ此ニ由テ而シテ彼レヲ求ムハ、猶木ニ縁テ魚ヲ求メ逆行シテ而シテ進ンコトヲ求ムルガ如シ。百年ヲ待ツトイヘドモ恐クハ我獨立ノ實効ヲ見ル能ハザランコトヲ。

今我レ吾ガ寡ヲ以テ各國ノ衆ニ當ラント欲ス、宜ク先ヅ其合從ヲ解クベシ。其合從ヲ解カント欲セバ先ヅ各國ノ利害ヲシテ相依ラザラシムベシ。其方乃チ各國中二三大國尤モ我レニ便ナルモノヲ選ビ、之ニ謂テ曰ク、貴國其領事裁判權ヲ棄テ、貴國人民ヲシテ悉ク我法律ニ服從セシメバ則我レ貴國人民ニ許スニ内地雜居、鑛山、諸工營業ノ便ヲ以テスベシト。彼レ必ズ應ズ

ル者アラン。是レ我國治外法權ヲ廢スルノ初步也。首トシテ應ズルモノハ乃チ魯米伊ノ三國ナラン。若シ三國ノ人民獨リ内地雜居諸工營業ノ便ヲ得バ、必外商ノ利ヲ專有スルニ至ラン。然シテ他外國商賈ノ其利ヲ競ハント欲スルモノ、同等ノ便宜ナキヲ以テ相競争スルヲ得ズ、終ニ自ラ其治外法權ヲ拋棄シテ以テ内地雜居ノ准許ヲ得ント欲スルモアラシ。瑞西和蘭等ノ人民ノ如キ則是ナリ。其他英佛獨ノ如キ徒ラニ其強ヲ恃ミ、其人民ヲシテ我法律ニ服從セシメザラント欲ストイヘドモ、而モ其人民自ラ進テ治外法權ヲ拋棄シテ以テ其利ヲ競争セント欲スルニ至リ、利害去就ノ勢終ニ防グベカラズ。其政府亦應サニ之ニ從ハザルヲ得ザルベシ。是レ三晋先ヅ亡テ而シテ齊楚獨リ其強ヲ保ツ能ハザルニ似タリ。

或ハ之ヲ難シテ曰、各國條約皆最優待國云々ノ條款アリ。苟モ一國ニ准許スルノ條件ハ即之ヲ各國ニ准許セザルヲ得ザルノ約ナリ。是レ則各國ノ條約同時同一ノ改正ニアラザレバ之ヲ行フ能ハザル所以ナリ。今若シ三國ノ人民ニ内地雜居ヲ准許セバ、即同時ニ之ヲ各國人民ニ准許セザルヲ得ズト。三良曰ク、然リ彼レ前三國ノ例ニ由テ之ヲ請ハ、乃我レ亦應サニ三國ノ例ニ准ジテ之ヲ許スベシ。是レ我望ム所ノミ。何ノ不可カ之アラン。彼レ將タ其治外法權ヲ維持シテ特ニ三國同一ノ權利ヲ得ント欲センカ、是レ獨衆人ノ耶蘇聖刹ニ入ヲ見、乃チ謂ク我モ亦同等ノ人民ナリト帽ヲ脱セズシテ之ニ入ラント欲スルガゴトシ。譬ヘバ猶衆人ノ觀劇スルヲ見乃



チ謂ク、我モ同等ノ人民ナリト棚錢ヲ出サズシテ劇ヲ觀ント欲スルガ如シ。孰レカ之ヲ可トセ  
ンヤ。夫レ帽ヲ脱スルハ乃チ聖刹ニ入ルノ禮儀ナリ。棚錢ヲ出スハ乃チ劇ヲ觀ルノ代價ナリ。  
今吾ガ法律ニ服従スルハ乃チ内地雜居ノ禮儀也。代價也。其禮ヲ行ハズ其價ヲ出サズシテ獨リ  
其權利ヲ得ント欲ス、妄ニ非ンバ狂ナリ、設シ此說ヲ以テ一理アリトセン乎、往年吾樺太ヲ魯  
ニ與フガ如キ、千島ハ即其代價也、猶各國最優待國ノ條約ニ由リ樺太同一ヲ要求スルノ權利ア  
リト云フガゴトシ。西洋稗史アリ、巧ニ強弱ヲ凌グノ情勢ヲ描出ス。曰ク一日羸羊清波ノ下流  
ニ飲ス、猛狼忽然來リ怒テ曰、汝何ゾ我浴スル所ノ清水ヲ攪亂シテ汚泥ヲ揚ル乎ト、羊戰慄出  
ル所ヲ知ラズ。乃答テ曰ク、小生下流ニ飲ス、何ゾ汚泥ヲ上流ニ溯シテ以テ大爺ノ浴ヲ妨ゲン  
ヤ。寧ロ大爺ノ我飲水ヲ濁スルコトナカラシヤ。然リトイヘドモ偶々以テ大爺ノ忌諱ニ觸ル、請  
幸ニ恕セヨト。言辭甚懇懃ナリ。狼益々怒テ曰、汝何物ノ黠兒カ敢テ大家ニ對シ喋々理由ヲ辯  
ズ、我レハ只汝ノ肉ヲ欲スルノミ、汝猶辯ズル所アリヤト、竟ニ之ヲ噬食ス。斯ノ如ンバ則區々  
ノ理論懇懃ノ言辭何ノ益カ之アラン。偶々以テ其凌虐ヲ益スルニ足ル。寧ロ初ヨリ其爪ヲ鋭  
クシ其咆哮ヲ壯ニシ、以テ待ツアル耳。況ンヤ未ダ各國中此ノ如キノ暴論ヲ實際ニ主張スルモ  
ノアルヲ聞ザルヤ。其偶々之アル則一二術數ノ徒虛聲ヲ以テ合從ヲ維持セント欲スルノ方略  
ニ過ザル耳。世一二暴客如此モノアルヲ以テ聖刹ヲ閉テ劇ヲ演ゼザラント欲セバ孰レカ之ヲ嗤

ハザル者アラシヤ。

或ハ又難ズルモノアラン、曰設令ヘ子ノ言ヲシテ行ハレシメバ乃其治外法權ヲ棄テ來ルモノ  
陸續トシテ之アラバ則何國人ヲ問ハズ皆内地雜居鑛山營業等ヲ准許セザルヲ得ズ、然ルニ我人  
民資本ニ乏シク工業ニ慣レズ、外國人ト競争スル能ハザルヤ必セリ、到底我内地ノ產原悉ク外  
國人ノ專有スル所ト爲ラン、將タ何ゾ我富強ニ裨益スル所アランヤト、三良曰、是我富強ノミ、  
抑我富強ヲシテ歐米各國ニ並立セシメント欲セバ、乃チ彼レノ資本技術ヲ輸入シ以テ我天產ヲ  
開進スルニ在リ、惟其速ナラザルヲ恨ムノミ。三良ノ此說ヲ持スルヤ久シ、今謹デ其說ヲ陳ヘ  
ン。伏テ乞フ聽ヲ垂レヨ。

夫レ魯國比得大帝ノ時ニ當リ、其國草昧舟車ノ利鑛山ノ業製作ノ工皆未ダ全ク開ケズ。人民  
無智蒙昧歐洲各國ノ富強ニ劣ルコト當ニ今日我國ノ歐米ニ於ルガ如キノミナラズ、大帝不世出  
ノ資ニ憑リ英邁ノ謀圖ヲ以テ草昧ノ邦國ヲシテ一躍歐洲各國ニ並行セシメント欲ス。大ニ外國  
人ヲ獎勵シ其魯國ニ來テ營業スル者ハ乃チ殊遇特典ヲ與ヘ、以テ之ヲ誘導シ、百方遠人ヲ懷  
シ、國土ヲ開擴スルヲ以テ要務ト爲ス。書ニ曰遠人ヲ柔ゲ百工ヲ來ストハ大帝有焉。子孫能ク  
厥ノ遺猷ヲ襲ギ、祖訓ヲ墜サズ、氣候ノ沍寒土地ノ僻鹵ニ係ハラズ、未ダ百年ナラズシテ其都府  
ハ乃チ歐洲大都ノ一ニ居ル、現今其景況ヲ目撃スルニ市街舖店ノ宏大ナル、家屋宮殿ノ壯麗ナ



ル、鐵道車馬ノ浩繁ナル、巨商豪賈ノ夥多ナル、鑛業製作ノ隆盛ナル、一トシテ目ヲ驚サハル者ナシ。然リ、而シテ其巨商豪賈ハ概ネ獨逸ニアラザレバ即佛人ナリ、其製造所ノ大ナルモノ多クハ英人ノ所有ニ係ル、其他鐵道航海ノ業、鑛山鐵工ノ利、魯人ノ從事スル所ノモノトイヘドモ過半ハ外人ノ資本ニ係ル、乃其富ハ概ネ外國人ニ屬スルヲ以テ魯國ニ裨益スル所ナシト謂テ可ナラン乎。決シテ然ラザル也。彼レ皆魯ノ法律ニ服従スルコト魯人ニ異ル所ナシ。巨商豪賈ノ産ハ則散ジテ輸出ノ貨物ト爲リ、鍾テ租稅ト爲リ擬テ百萬ノ貔貅ト爲リ、延テ萬里ノ鐵道ト爲リ、城堡甲艦砲銃ト爲ル。然ラバ則外人ノ魯國ニアル營業ノ隆盛ナルハ即皆魯國ノ富強ヲ致ス所以ナリ。蓋シ其人口我ニ二倍半(八千五百萬人)其歲入ハ乃チ我レニ十倍(無慮六億二千萬圓)陸軍ノ強我ニ二十五倍(八十八萬)鐵道ノ長我ニ二百倍(萬五千英里)其他海軍鐵艦砲銃等ノ具亦各々之ニ適ス、其非常有事ノ時ニ際シ國債ヲ募ル、乃チ數億萬金立コロニ集ル、是亦多クハ外國巨商豪賈ノ出ス所ニ係ルト云。

抑我國土天産ノ富饒ナル魯國ノ比ニアラズ、土地ノ廣袤人口ノ多寡魯國ニ及バズトイヘドモ而モ其人民ハ皆純粹ノ國民也、而シテ其一般ノ教育ニ於ル魯國人民ニ優ルコト數等(魯國徵兵千八百六十年ニ於テ百人中字ヲ知ルモノ僅ニ二人アリ千八百七十年ニ於テハ乃チ十一人アリト云)顧ルニ其富強未ダ及ザルモノアリ。何ゾヤ、蓋シ國ノ富強ヲ進メント欲セバ須ク先ヅ其産

原ヲ興起スベシ、産原興起セバ則貿易隆盛也。貿易隆盛ナレバ則歲入増殖セン。海陸軍備隨テ充實スベシ。是レ乃チ富強ノ實也。蓋シ産原ヲ興起スル未ダ曾テ人工ニ由ラズンバアラズ。其目夥多アリトイヘドモ其大ナルモノハ即鐵道ヲ架シテ以テ運輸ノ便ヲ開キ、鑛山ヲ開拓シ製鐵場ヲ設置スル等ノ數事ニ在リ。此數事能ク興起セバ則自餘ノ産原隨テ繁殖スベキ也。我政府此ニ見アリ夙ニ生徒ヲ歐米ニ遣シ以テ其技術ヲ傳習セシメ、鐵道電線ヲ架シ以テ運輸通信ノ便ヲ圖リ、技術家ヲ海外ニ聘招シ以テ製鐵場ヲ創設シ、孜孜惰ラザル事此ニ十有餘年、其効見ルベキモノアリ。然リトイヘドモ惜ラクハ其規模未ダ充分ナラズ、顧ミテ歐米各國ニ凌駕スルノ期ヲ望ム、茫乎トシテ津涯ナキガ如シ。蓋シ維新ノ政百事草創ニ屬ス。其規模ヲ擴充セント欲シテ勢遽カニ爲スベカラザルモノアリ。

今夫レ歐米各國人工産製原ノ度我レニ超越スル事既ニ數等、而シテ尙日々ニ益々進デ已マズ我レ之ト並行シテ相凌駕セント欲ス、宜ク何ヲ以テカ相競争スベキヤ、不充分ノ資本ト僅々タル傳習生徒及聘招外人トニ由テ以テ相競争セント欲ス、當ニ追及スル能ハザルノミナラズ、或ハ恐ル彼レノ進度我ヨリ速ナルヲ以テ、吾勢却テ逡巡之ヲ距ル益々遠カラン事ヲ。故ニ速ニ歐米ノ富強ニ凌駕セント欲セバ、即魯國ノ例ニ倣ヒ、海外ノ技術資本ヲ輸入シテ以テ我天産ヲ開進スルニ若カズ。其方則彼レヲシテ自ラ其資本ヲ投ジ、其技術ヲ施サシムルニ在リ。彼レヲシ



テ自ラ其資本ヲ投ジ、其技術ヲ施サシメント欲セバ則利ヲ以テ之ヲ誘クニ在リ、利ヲ以テ之ヲ誘カント欲セバ、則彼レニ内地雜居諸工營業ノ便ヲ與フルニ在ル耳。

今夫レ歐洲各國其本土ハ概ネ其技術智巧ヲ極メ、天産ヲ盡シ資本流溢ス。故ニ其利益ハ幾ト最少限ニ達スルモノアリ。(英國ハ資本ノ利子年百分ノ三和蘭ハ百分ノ二、五)故ニ其人民ハ百方其技術資本需用ノ場所ヲ求メテ而テ行ント欲ス。是レ西洋人ノ氣風進取ニ富ム所以ナリ。我國土ハ乃チ天産ノ富國也。而シテ未ダ人工ヲ經ザルモノ多シ、今若シ彼レノ資本ヲ此ニ移シ彼レノ技術ヲ用キシメバ、其利ハ乃チ本國ノ産業ニ倍蓰スルヤ必セン。彼レ應サニ争テ之ニ赴クベシ。是レ自然ノ勢ナリ。故ニ日利ヲ以テ之ヲ誘クニ在リト、誠ニ能ク斯ノ如クナレバ乃チ産原ノ繁殖期シテ而シテ埃ツベキ也。産原繁殖セバ乃チ輸出盛大ナリ。輸出盛大ナレバ其國貧且ツ弱ナラント欲ストイヘドモ可得乎。

縱令ヘ外國人内地ニ浸入シ、其利益ヲ占有スルモ我レ敢テ顧慮スル所ナキモノハ、則我法權確立シ彼レヲシテ我人民ト同ク我レニ服從セシムル事猶獨人佛人ノ魯ニ在ルガ如クナラシムルニ在リ。若シ然ラスシテ妄リニ彼レヲシテ我ガ内地ノ利益ヲ占有セシメバ、乃チ國中無數ノ小獨立國ヲ生ズルガ如シ。其富我富ニアラズ其強我強ニアラズ、國憲紊亂終ニ我獨立ヲ保持スル能ハザルニ至ラン。是レ亦深ク警察セズンバアルベカラザルナリ。

今外國人ヲシテ治外法權ヲ去リ、自ラ本國ノ資本技術ヲ移シテ之ヲ我内地ニ用キシメント欲セバ、前陳ノ如ク宜ク先ヅ締盟各國中我ニ便ナルモノヲ選ビ、之ト約ヲ爲シ、彼レヲシテ其領事裁判權ヲ廢セシメ、我レ彼レニ許スニ内地雜居諸工營業ノ便ヲ以テスベシ。我政府及地方官モ亦須ク意ヲ加ヘ、不公不理ノ所措ヲ謹ミ、彼レヲシテ我内地ニ安堵セシムベシ。是ノ如クナレバ乃チ他ノ外商亦其利アリ害ナキヲ見バ、豈永ク其利欲ヲ抑遏スルヲ得ンヤ。必ズ陸續競テ以テ至ラン、終ニ各港ノ領事裁判廳モ亦自然ニ無用ニ歸スベシ。(在外國人相互ノ民事ハ姑ク其領事等ニ委スルモ可ナリ、是レ外國ニ於テモ類例アレバ我國權ヲ傷ル事ナシ)

是レ理論ヲ後ニシテ利ヲ以テ之ヲ誘導シ、彼レヲシテ防グノ方ナカラシメ、漸次以テ我目的ヲ達シ、一面ハ乃チ我ガ尤惡ム所ノ治外法權ノ弊ヲ除キ、一面ハ乃チ我ガ尤モ樂フ所ノ富強ノ利ヲ得、眞ニ一舉兩得ノ策ナリ。若シ又治外法權ヲ拋棄セズシテ偏ヘニ内地雜居ヲ得ント欲スルモノアラバ、乃チ棚錢ヲ出サズシテ劇ヲ觀ント欲シ、千島ヲ讓ラズシテ權太ヲ奪ハント欲スルノ徒ノミ。我何ゾ其狂妄ヲ聽カン乎。我レ惟我ガ條理ノ有ル所ニ立チ確乎トシテ動カザルノミ彼レ若シ之ニ繼グニ暴ヲ以テセントスル乎、是レ我ヲ羸羊視スルノ豺狼也、我惟吾爪牙ヲ銳クシ我咆哮ヲ壯ニシテ以テ待ツアル耳。何ゾ自ラ甘ンジテ羸羊ト爲ルベケンヤ。況ンヤ彼レ未必シモ豺狼タラザルニ於テヲヤ。三良自責任アルニアラズ、而シテ忌諱ヲ憚ラズ敢テ呶々此ニ及



ブモノハ、蓋シ近日内地鐵道敷設益々盛ニシテ、我國東西兩端ノ往來、一兩日ニ縮小シ、其事  
情往日ノ日本ニアラザルベシ。其時ニ當リ永ク外人居留地ノ制限ヲ維持セント欲スルモ勢得べ  
カラザラントス。之ヲ要スルニ氣運既ニ彼レト並肩セザレバ則其奴隸ト爲ラズンバ已マズ。殷  
鑑遠カラズ、東洋ノ外交事情甚切迫、之ヲ今日ニ救濟セズンバ將ニ噬臍ノ悔ヒアラントス。匹  
夫野人トイヘドモ苟モ我皇民タル者豈獨リ其災殃ヲ免ルヲ得ンヤ。是レ上下薪ニ坐シ膽ヲ嘗ル  
ノ秋ナリ。伏テ願クバ閣下其唐突ノ罪ヲ恕シ、其衷情ヲ察シ採擇スル所アラバ天下幸甚。

明治十四年十二月

尾崎三良 謹白

## 長崎省吾外交意見

坤輿中林立ノ諸邦漸ク開化ニ赴キ文明ニ進ミ、今ヤ汽船以テ四海ニ航シ、鐵道以テ萬  
里ニ趨リ、電線以テ坐ナガラ天涯地垠ノ音信ヲ瞬時ニ達シ、彼我ノ往來應酬交接ノ頻  
繁ナル、比隣モ雷ナラザルノ今日ニ方リ、機ヲ察シ勢ヲ審ニシ以テ拮据執掌セザルべ  
カラザルハ自然ノ情理ニシテ、亦之ヲ講究セザルベカラザルナリ。小官謏劣無似外交  
ノ眞意要訣ニ於テ固ヨリ通曉スル所ナシ。然レドモ亦嘗テ英國駐紮官ノ末ニ承乏シ、  
多年外交社會ノ空氣ニ栖息シ、其一班ヲ視察スル所ヲ以テスルニ、蓋シ修好ノ至難タ  
ルヤ臨機敏斷ノ宜キヲ得テ初メテ全キヲ得ルモノナリ。狂瀾ヲ既倒ニ救ヒ、危ヲ轉ジ  
テ安トナシ、成否處ヲ易ヘ禍福地ヲ變ズル等皆此レニ由ラザルナク、其間殆ド至妙至  
理ノ名狀スベカラザルモノアリテ存スルナリ。夫レ人各好尙スル所アリテ然後ニ大ニ  
爲スアルハ古今ノ通慣天賦自然ノ常理ナリ。小官ノ交際學ニ於ル如キ亦平素嗜ムノ深  
キ禁ゼント欲シテ禁ズル能ハズ、故ニ性ノ近キ所之ニアリト自信シ、在英ノ日專心此



ニ從事シ、一意此ニ注目シ、誓テ險ヲ冒シ難ニ耐ヘ、煩勞ヲ厭ハズ研習ヲ倦マズ、以テ聊カ知得スル所アルヲ覺ユルノミ。豈ニ敢テ大ニ爲スアルト云ハンヤ。是ニ於テカ歸朝後更ニ本邦外交ノ沿革ヲ審案シ、往時幕政ノ日、國際交通ノ端緒ヲ開キシヨリ以降現今ニ至ル迄ノ狀況ヲ通觀歴察シ、乃チ之ガ沿革ヲ分チテ三期ト爲シ、其由テ來ル所ノ原因ヲ叙述シ、問々附スルニ管見ヲ以テシ、謹デ閣下ノ左右ニ呈呈ス。蓋シ外交ノ要タル條理明暢ニシテ運用ノ妙ヲ其間ニ寓シ、機ニ臨ミ變ニ應ジテ之ヲ處理スルニ在リト雖モ、之ヲ談ズルニ至リテハ僅々數紙ノ能ク盡クス所ニアラズ。今唯其概畧ヲ陳ブ、冀クバ鈞務ノ餘暇、一ト度電覽ノ榮ヲ得バ何ノ大幸カ之ニ過ギン。俯シテ越俎ヲ願ミズ尊嚴ヲ冒瀆ス。惶恐無已再拜

明治十八年七月十日

長 崎 省 吾

伊藤 宮内卿 閣下

## 清國政府ノ朝鮮ノ遣米使節事件ニ干渉スルノ報アルニ付米國政府ノ決心

朝鮮清國ニ關スル米政府ノ訓令云々

清國政府ガ朝鮮ノ遣米使節事件ニ干渉スルトノ報米國ニ達セシヤ、米國政府ハ在北京米國公使ニ訓令シテ「米國政府ハ朝鮮政府ノ遣米使節ノ事ニ關シテ、清國政府ガ干渉スルヲ許サズ」トノ旨ヲ清國政府ヘ公陳セシメ、且ツ場合ニ依リテハ北京ヲ退去スルモ妨ゲナシト訓令シタリトノ趣ヲ米國人アーレン氏ヨリ聞取リタリトテ、「デニソン」氏鳩山氏ヘ内話セシ由ナリ。

廿年十二月一日



## 大久保參議征蕃事件ニ付テノ副啓

### 極密副啓

征蕃ノ義舉タル、内外人民ノ保護上ニ出、蕃民ヲ化シテ人道ニ導キ、將來航海者ノ妨害ヲ除カントノ一大美意ニシテ、是我條理ノ撓屈セザル眼目ノ旨趣ナリ。此道理ヲ有スルガ故ニ、支那政府モ終ニ屈伏スルニ至リ、各國公使等ニ於テモ我ニ左袒スルノ情ヲ來セシナリ。故ニ此道理ハ不可失ノ至寶ニシテ、益之ヲ貫徹セザルベカラズ。然ルニ彼レヨリ資給スルトコロノ五拾萬兩ノ金額、將來如何シカ使用シテ可ナランカ、此處分ニ依テ大ニ日本國ノ名譽ニ干係アレバ厚ク圖盡スルヲ要ス可シ。小子聊慮ルトコロノ旨趣ヲ左ニ揚グ。

一 十萬兩ノ金額ハ難民撫恤ノ名目トイヘドモ、名ヲ假リタルハ衆人ノ知ル處ナレバ、死者ノ家族ヘ相當ノ扶助金ヲ給與シ、難ヲ受ケ資財ヲ奪ハレタルモノ等ヘ同斷分配ス可シ。其餘金ヲ以テ征臺ノ將士死者ニ施シ、且功勞アルモノニ酬ユルニハ不足ナルベシ。因テ十萬

兩ノ額ハ其用ニ供シ可ナルベシ。

一 四拾萬兩ノ額ハ奏聞ノ上

宸斷ヲ以テ受用セラレザル旨ヲ清國皇帝ヘ、謝却アルベシ。如何トナレバ到底我趣意人民ヲ保護シ、内ヲ惠ミ外ヲ恤フノ他ニ出デザレバ、建房道路ノ費モ亦之ガ爲メナリ。故ニ此額ヲ以テ支那政府我意ヲ意トシ、我爲ストコロヲ爲シ、一ニ蕃民開導ノ用、航客ノ安寧ヲ護スルノ資ニ充テバ

聖慮ニ於テ、満足アラセ玉フハ疑フ可カラズ。因テ此四十萬兩ノ額ハ受用セララルヲ欲セザル處ナリ。

右英明ニ非ザレバ之ヲ視ルコト能ハズ。大斷ニ非レバ決スルコト不能、幸ニ我

皇帝陛下英明絶倫ニ在シ、大量果斷ノ天資ヲ具セラレ候得バ、若シ一ニ

宸斷此ニ出デバ、清國之ガ爲ニ氣ヲ奪ハレ、各國之ガ爲ニ膽ヲ拔カル可シ。實ニ千載ノ美談、古今ノ勝事ト謂ハザルベケンヤ。曾テ我馬關ノ償金、英米蘭ニ可拂ノ殘額アリ、當春政府到然之ヲ消却シテ、英國ノ貪心ヲ殆ンド恥シメタリ。米國議院ニ於テ謝却ノ公論アリトイヘドモ、外各國ニ對シテ之ヲ實行スルコト能ハズ。然ルニ我國亞西亞ノ一小島ニシテ、文明各國ノ未ダ爲サザル處ヲ爲シ、近ク清國ノ疑心ヲ取り、遠ク歐米ノ意表ニ出デバ、我



國ノ盛名赫々トシテ輝キ、豈ニ宇宙間ノ快事ナラザランヤ。劔ヲ提テ敵ヲ退治セシヨリモ此大斷ニ於テハ其功其利一層ノ高處ニ居ル可シ。去ナガラ小子其任ヲ十分ニ盡スコト不能、反ツテ措大ノ事ヲ説テ之ヲ掩フニ似タレバ、他ニ向テ公言スベカラザルノ情アリ。然リトイヘドモ國權ノ上ヲ論ジ、利害ノ間ヲ謀リ候テモ、僅々タル四十萬ノ額ニ萬倍スベシ。是眼前ノ益ニハアラザルナリ。

再、本文ノ趣意ハ之ヲ行フトイヘドモ、西郷都督復命ノ上一言示サレン上ナラデハ不可然候、ソレマデハ先御含置下サル可シ。

拜啓。益御安固相來奉務奉承賀候。陳者當方談判ノ都合意外荏苒、折角玄武丸モ差立ラレ候得共、何分不恁底在之ノミニテ、終ニ今日ニ推移心外ノ至リニテ、舊來ノ形行ハ公信ヲ以テ上申候ニ付別ニ不贅候。

去ル五日晚景ニ至リ良公使來館、總理衙門ノ依頼ヲ受ケ五拾萬兩之金額ヲ差出シ證書相認ヘシ故御承知可於下哉。拙者ヨリ相伺呉レ候事ニテ條上候如何ノ御趣意ニ可有之哉トノ事ニテ、此返詞ハ實ニ兩國幾萬ノ生靈ノ命脉ニ係ル點ハ無論、我人民保護上ニ起リ義舉タル趣意ノ立否ニモ關スル大事ニテ、小子ニモ熟考ノ上一刀兩斷ヲ以テ公信上ノ通及獨決候。尤至理至當ノ所分ト見据小臣一己ノ見ニテハ天地不仰無恥トコロナリ。

支那政府我征臺ノ舉ヲシテ義務ト見認、是迄兩國間ニ起リタル臺地ニ關スル紛論今後取消シ資銀五十萬兩ヲ差出スベシトノ事ニ至リ候得バ、十分彼ノ權利ハ殺クルトコロアツテ我ノ權利ニ於テ聊モ傷カズ、且我人民保護上ニ起リタル義舉ノ盛名ハ宇内ニ對シ千載ニ互リ磨滅ス可カラズ。然レバ此上何ヲカ求メン。

一、償金ノ論ニ至リ候テハ、固ヨリ要求スルハ十分我ニ道理アルトコロナリ。去ナガラ彼讓ルトコロアツテ我義務タルヲ證認シタル上、只金額ノ多寡ヲ以論ヲ破リ、兩國交際ヲ絶チ候ハ我本來ノ趣意ヲ失フニ似タリ。是小子名義ヲ重シトシテ他ヲ顧ミズ斷行スル所以ナリ。

一、彼暴ニ出戰ヲ開候得バ我戰ヲ以應ズルコトハ固ヨリ宸斷以テ決セラル處ナレバ一步モ退クベカラズ。且戰ノ上ニ於テハ敢テ恐ルベキナシ。然ルニ彼和好ヲ主トシ談判上ニ於テ末戰ノ意ヲ以テ口ヲ開クコトナシ。是レ大ニ意アル處ナリ。談判破裂ノマ、ニテハ戰ノ名義ナシ。唯公使謁帝ノコトニ於テ其名アリトイヘドモ、段々教師ニモ調サセ候得共、公法上ニ於テ十分ナラズトノ論ナリ。因テ小子ニモ甚困若當惑シタル事ニ候。



## ボアソナーード氏ノ恒守中立論

歐洲ノ國際法ニ於テ恒守局外中立ニ關スル適則ヲ求メント欲スルモ蓋シ得ベカラズ。其應用ノ極テ稀少ニシテ未ダ以テ本件ニ對スル普通ノ論義ヲ編定スルニ足ラザルニ依ルナリ。

余ハ今歐洲ニ於テ恒ニ局外中立ヲ守ルノ國唯四個アルヲ見ル。瑞西、白耳義、塞爾維及ビ塞屈遜堡是レナリ。而シテ其瑞西ノ如キハ局外中立ヲ守ル日既ニ久シト雖モ、白耳義ノ如キハ千八百三十一年ニ於テ之ヲ立定シ、塞爾維ハ千八百五十六年ニ於テシ、塞屈遜堡ハ千八百六十七年ニ於テセリ。

是等諸邦ノ局外中立ヲ立定シタル處以ノモノハ、蓋シ其國利益ヲ圖ルニ出タルヨリ、寧ロ主トシテ隣邦ニ於テ他邦ノ損害ト爲ルベキ絶大ノ利益ヲ其國ニ發見シ、以テ之ニ加フルコトアラントスルノ併吞ヲ豫防スルニ出タルモノトス。

此局外中立ノ立定タル、當時ノ諸大邦タルモノ必ラズシモ皆盡ク之ニ參預シタルニアラズ。而シテ其最モ奇トス可キハ局外中立ノ宣告ヲ受ケタル邦ノ常ニ皆其會議ニ臨マルルコト是ナリ。

塞爾維ノ千八百五十六年ノ巴里條約ニ臨マザリシガ如キ、即チ是レナリ。而シテ塞屈遜堡ノ如キモ千八百六十七年ノ倫動公會ニ臨マザリシハ余ノ信ジテ疑ハザル處ナリ。

白耳義ノ如キモ亦其千八百三十一年ノ公會ニ臨マザリシハ全ク堅ク信ズル所ニシテ、此際白耳義ノ分レテ以テ立國シタル和蘭ニ於テモ、其謀國及異議アルニ拘ラズ、該公會ニ臨マザリシハ亦余ノ疑ヲ容レザル所ナリ。

此ノ如キ場合ニ於テ臨會セザル大邦ハ、其臨會ナクシテ決定セラレタル約款ニ檢束セラレザルベキハ理ノ當ニ然ルベキ所ニシテ、之ヲ以テ立テ、原則ト爲スモ不可ナカルベキナリ。然ルト雖モ其局外中立ノ公許若シクハ默許サレタルノ後、永久ノ日時ヲ經過シタルニ於テハ、是レ即チ諸大邦ノ之ヲ承認シタルノ證タリトスベシ。

第二等邦國ノ如キモ仍ホ一層局外中立ヲ遵守ス。何トナレバ彼レ默々ニ此局外中立ヲ承認シタリシノミナラズ、其冒險ノ意ナキ以上ハ之ヲ侵犯シ得ベカラザルヲ以テナリ。

平時ニ於テハ是等ノ難問ノ起ルコトナシト雖モ、戰時ニ至テハ其局外中立ノ約ニ調印セザリシ所ノ大邦ハ、其局外中立ノ本邦ニ於テ、自ラ其約ヲ破リタルニアラザル以上ハ、其局外中立ヲ認メズシテ、己レニ對シ無効ノモノナリト爲スハ、性法ヲ犯ス者トス。故ニ普佛戰爭ノ時ニ當リ若シ白耳義ニ於テ戰國ノ一方ト相交通スルコトアリタルニ於テハ、他ノ一方ハ其局外中立



ノ約ニ調印シタルノ如何ニ拘ラズ、以テ其約ヲ破リ、此局外中立ヲ併スコトヲ得タリシナルベシ。今日足下ニ關スル場合ハ、特ニ高麗ニ於テ局外中立ヲ立定シタルニ於テハ、何レノ國ガ之ヲ認ムベキヤヲ知ラントスルニアラズシテ、猶ホ其局外中立ハ如何ニシテ之ヲ立定シ得ベキヤヲ知ラントスルニアリ。

余ハ左ノ二問ヲ設ケテ之ヲ論ゼントス。

第一問

甲 高麗ハ請求スルコトナク又承諾スルコトナキニ局外中立ヲ宣告シ得ラルベキ歟。

乙 此ノ場合ニ於テ局外中立ハ何レノ國ニ由テ宣告シ得ベキ歟。

第二問

甲 高麗若シ局外中立タルヲ認メラレンコトヲ望ムニ於テハ、何レノ國ニ向テ之ヲ請求スベキ歟。

乙 此局外中立ノ結果如何。

一

甲 余ハ高麗ニ於テ局外中立タルヲ望ムノ念慮ナキモ之ヲ宣告シ得ラルベシト信ズ。

蓋シ此宣告タル、彼レ之ガ外タルベキニ依リ、之ヲ以テ彼ヲ拘束シ得ベカラザルハ論ヲ俟タ

ズト雖モ、此局外中立ヲ立定シタル公會若クハ條約ニ調印シタル諸大邦ニ至テハ、之ヲ拘束スルニ足ルノ力アルコト明カナリ。故ニ若シ此大邦ノ一ニシテ高麗ノ獨立ヲ侵犯スルコトアルニ於テハ、則チ之ト共ニ調印シタル他ノ諸大邦ヨリ之ニ對シ征戰ヲ開クノ一ノ場合タルベシ。

高麗ニ於テ若シ其國ノ局外中立ヲ認メタル大邦ハ、勿論、其未ダ之ヲ認メザルモノト雖モ、總テ他ノ諸大邦ノ一ト攻守ノ同盟ヲ爲スコトアルニ於テハ、其他ノ大邦ノ其約束ヲ免カルベキハ亦辯ヲ俟タザルナリ。

乙 此場合ニ於テハ何レノ大邦ガ其局外中立ヲ宣告スルヲ得ベキヤ。

余ハ之ニ答ヘテ、是レ最モ其國ニ利益ヲ有スルノ大邦ナリト云ハントス。

今茲ニ利益ヲ以テ權利ノ因由原則ト爲セルハ驚クニ足ラザルモノトス。何トナレバ此因由タル、私法ニ在テハ問々稀ニ應用スル者ナリト雖ドモ、萬國公法ニ於テハ最モ勢力アルモノタルバナリ。

實ニ若シ局外中立ノ宣告ナキニ於テハ、高麗ノ隣邦ハ之ヲ併合セントシ、他邦ハ又將來ニ侵害ヲ受ケントスル國ノ獨立ヲ保護セントシ、此隣邦ニ向ヒ抗敵スルコトヲ得ベシ。故ニ戰場ヲ預防センガ爲ニハ、諸邦ハ其國（高麗ヲ云フ）ノ苟モ自ラ戰ヲ開クニアラザル以上ハ、之ニ向ヒ侵犯ヲ爲サザラントコトヲ互ニ規約セザルベカラザルヲ悟ルベシ。故ニ清國及魯國ハ爾來高麗ヲ



認メテ局外中立國ト爲スベキコトヲ宣告スルヲ得ベク、且仍ホ進テ相約スルニ之ヲ侵犯セント謀圖スル他ノ諸大邦ニ對シ、此局外中立ヲ保護センコトヲ以テスルコトヲ得ベシ。

余ハ今又茲ニ高麗ニ於テ自ラ其一隣邦ノ謀圖ヲ恐ル、ガ爲メニ、之ニ向ヒテ其局外中立國タルヲ認メ、且保證セシコトヲ請求シタリト假定センニ、此場合ニ於テハ局外中立ノ一タビ宣告セラレタル以上ハ、高麗ハ必ズ之ヲ遵守セザルベカラザルノ義務アルベシ。即チ前題ノ場合ト著シキ差異アルヲ見ルベキナリ。

此場合ニ於ケル局外中立ハ前題ノ場合ト同一ノ大邦又ハ己レ高麗ニ對シ何等ノ敵意ヲ懷カザルモ、他邦ノ此國ニ對シ公正良直ヲ守ラザランコトヲ恐ル、大邦ニ由テ宣告セラルルコトヲ得ベシ。

此ノ如キ場合ニ於テハ高麗三隣邦(清國、魯國、日本)ノ一邦、(例ヘバ魯國ノ如キ)或ハ其局外中立ヲ認ムルコトヲ欲セザルコトアルベシ。

若シ然ルコトアルニ於テハ如何ナル結果ヲ生ズベキ哉。

魯國若シ一朝高麗ノ地ヲ侵スコトアリテ、他ノ隣邦其己レノ利益ヲ犯スコトヲ恐レ、且ツ高麗ニ於テ自ラ其約ヲ破タルコトアラザルニ於テハ、先ヅ始メニ使臣差辨ノ方法ニ依リテ之ニ干

預シ、次テ又要用アルニ於テハ兵力ニ依テ之ニ干預セザルベカラザルナリ。但シ高麗ニシテ若シ最初ニ魯國ノ權利ヲ犯シタルコトアルニ於テハ、清國及日本ハ高麗ヲ防護スルノ義務アラザルベシ。

人或ハ余ニ向ハン。歐米諸大邦ノ高麗ト條約ヲ結ベルモノト、此局外中立ノ宣告ニ干預シ得ベキヤ如何ト。然リ高麗ニ於テ若シ之ニ干預センコトヲ請求シタルニ於テハ、之ヲ爲シ得ベキコト固ヨリ論ヲ俟タズ。然リト雖モ若シ其請求ナキニ於テハ、歐米諸大邦ハ其國ニ利益ヲ有スルノ小ナルガ故ニ必ズシモ之ニ干預スルコトナカルベキナリ。

然リト雖モ高麗ハ之ヲ招テ其公開ニ臨マシムルヲ以テ策ノ最モ得タルモノトス。何トナレバ之ガ爲ニ其局外中立ニ保證ヲ與フコト蓋シ少小ナラザルベキヲ以テナリ。

千八百八十二年十月二十九日

於東京 ボアソナード記

問

ボアソナード氏ノ恒守中立論



歐洲ニテ「ヘルヂー」、シユイス、リウキサンプユク、ノ三國ヲ永久中立國トシタルハ、歐洲各國ノ叶議ニ成立ツ者トス。試ニ向フ若シ一國又ハ二三國此議ニ預ラザルトキハ、他ノ關係國ノミニテ永久中立ノ決定ヲナシ得ベキヤ、否。

第一、右ノ場合ニ於テ若シ會議ニ預リタル一國異議ヲ唱フルトキハ如何ノ結果ヲ生ズベキヤ。  
第二、又會議ニ預ラザル一國異議ヲ唱フルトキハ如何ノ結果ヲ生ズベキヤ。

答

永久中立(瑞西、白耳義、リウキサンプール)

右三國ノ中立ヲ是認シタル聯合會議ニハ、歐洲諸國都ヘテ皆ナ之ニ預リタルモノトハ思考スベカラズ。歐洲ニ於テ萬國公法ニ關スルノ問題ヲ決定スル聯合會議ニハ、大國ノミニテ預ルヲ以テ通常ノ例トス。(佛朗西、英吉利、日耳曼、奧太利、魯西亞ヲ以テ歐洲大國トス。近來伊太利モ大國ト承認セラレタリ。西班牙ハ未ダ大國トハ承認セラレザレドモ、遠カラズ大國ト承認セラルベキ者ナリトノ説アリ。然レドモ丁抹、瑞西、希臘、其他ノ諸國ハ其國有ノ權利ニ關スルコトヲ議決スベキコト有ルニアラザレバ、聯合會議ニ加入セラレザルモノトス)

聯合會議ノ決議ハ純粹ノ法理ニ於テハ之ニ預カラザル他ノ諸國ニ義務ヲ負ハシメズト云フヲ

得ベシ。然レドモ會議ニ預ラザル諸國ニ於テ、聯合會議ノ決議ヲ尊敬セザランコトヲ(即チ輕慢破毀セントスルヲ云フ)企望スルモ、決シテ實際ニ其效ナキモノトス。何トナレバ會議ニ預リタル諸國ハ聯合會議ニ於テ決定シタル事ヲ變換セントスル他ノ諸國ノ行爲ト反對スベク、殊ニ兵力ヲ以テ白耳義若クハ其他中立國ヲ尊敬セシム可キヲ以テナリ。

前項記載ノ事ハ民法即チ性法上ノ法理ニハ適合セザルナリ。然レドモ歐洲ノ平和ヲ維持スルノ一方法ニシテ此點ヨリスレバ善良ナルモノトス。

以上ハ第二問ニ對スル應答ナリ。

(第一問ノ應答)今聯合會議ニ預リタル一國ニ於テ他ノ諸國ノ是認スル處置ニ反對ノ意見ヲ有スルモノト假定スベシ。此ノ場合ニ於テハ該異議國ハ左ノ二方法ノ一ヲ採ラザルベカラズ。

第一 聯合會議ヲ退ク事。

第二 議定書ニ其異議、抗載セシメ依然聯合會議ニ預ル事。

時トシテハ諸大國ノ中ニテ一國ノ不同意ハ爲ニ會議ヲシテ其目的ヲ達セザラシムルコトアリ且ツ他ノ諸國之ニ合併シ、遂ニ聯合會議ヲシテ何事モ決定セズ解散セシムルコトアリ。然レドモ若シ聯合會議ニ於テ一國異議アルニ拘ラズ、他ノ諸國其説ヲ維持スルトキハ、其決議ハ第二ノ場合ニ於ケルト同様ノ效力ヲ有スベシ。



異議國ハ法理ニ於テハ該會議ノ決議ニ檢束サル、コトナシト雖モ、若シ該異議國ニ於テ聯合會議ノ決定セル者ヲ破毀セント試ムルカ、又ハ中立ヲ尊敬セザランコトヲ企圖スルトキハ、該會議ニ於テ調印シタル諸國ハ之ニ干涉スベシ。而シテ此ノ如キハ戰爭ノ場合ナリトス。

東 京 千八百八十二年九月二十二日

ボアソナード手署

宇 川 盛 三 郎 譯

宇川盛三郎譯永久中立ニ關スル

意見書中不審ノ點ニ付テノ應答

他ノ諸國ハ之ニ合併シ、而シテ聯合會議ハ何事ヲモ決定セズシテ解散スルコトアルベシ。

右文中之トアルハ異議國ヲ指スナリ。他ノ諸國トハ聯合會議ニ預ル諸國中、異議ヲ除キテ其  
他ノ諸國ヲ指スナリ。該諸國ハ或ハ會議ノ發議ニ同意シタルコトアルベキモ、該諸國ヨリハ一  
層大ナル一國若クハ同等ナル一國ノ異議アルヲ見ルヨリ、更ニ己レモ亦他ノ諸國ヨリ別レテ異  
議國ニ合併スルヨリ、遂ニ聯合會議ヲシテ無効ニ屬セシムルコトアリトス。

外交上ノ集會ニ於テハ諸小國ニ於テ、大國ノ意向ニ從フヲ見ルコトハ實ニ屢々ナルモノトス  
日本ニ於テモ之ニ付テハ多少ノ經驗アラセラル、コトナルベシ。

東 京 千八百八十二年九月廿四日

ボアソナード手署

宇 川 盛 三 郎 譯

之ノ原文 *elle* ニ ム ヲ 加ヘタルハ拙者ノ誤リナリ。

德 用 人 說

按、泰西有二三小國、爲泰西各大國ニ立約、保護永遠無事、其於小國ニ有益實多、仍兩  
大國偶出ニ于戰、而小國只以三千餘人、屯駐邊界、自守吾圍、敵兵過境、示以禁地、不  
得越疆而馳、設有入境、則小國之政府、可下以行文照會、收其器械、羈其軍士、泊乎兩國和好、發  
放還歸、此爲大國互相保護之益、即如德トイテ法フランス、西千八百七十年之戰、法軍八萬、敗入法邊界  
之蓋斯國スイス、蓋斯一小國也、隨即備文按約理處、且各國中載明設他國交戰不得借用地、是以  
德、軍攻法、如假道于秘力斯國、頗爲近便、乃必違路前進、不能違背各國互立之約也、

ボアソナード氏ノ恒守中立論



小國爲各大大國互相約以保護、其有實益而無小損、卽此了然可知、以今朝鮮之情形言之、清國勞師糜餉、歲費不貲、推原其故、惟恐藩籬不守、強隣堆闖而入、茫無把握、理或然歟、抑思朝鮮爲清之後庭、亦卽與俄日之邊毗、連勢不相下、必至爭攘、雖千萬人駐防于朝鮮、何所益、愚以爲、如照泰西成法、而清俄日互相永遠保護朝鮮、卽至日後、別國設或不攻代借道於朝鮮國、而朝鮮日後派兵數千、沿境查防國中、立有和約、各國通商、而於清國可無遠慮、於朝鮮永護厚益、豈不善哉、竊思、日本之欲清國撤防者、推原其故、日本在邊、與朝鮮南海毘連、設如一朝有事、而駐防之清兵假道于釜山南海、朝發夕至、猝難防禦、日本籌及於此、是以急欲清國撤防歟、而日本意不在得一寸土、理勢然也、去年、朝日立約之時、俄國派員鼓掉而來、間有言、朝鮮爲清國後庭、亦卽與我國邊界、日本如有索債賠銀、則可、若夫土地寸步休割、以是知日之意不屬此而屬彼也、近聞、朝鮮心惶惑、以爲中日必見於此間、左可慨歎焉、日本已與朝鮮立約、仍在國中、率爾開衅、既得辜於國君、何取信放各國、吾謂、日本愚不及此、且日本意是欲清國撤防、故特派大使、前往清國、所議不合云、卽率兵赴洋、試想、清不撤防、日兵來擊、則此駐防軍士雖欲知難而退、而清國不更調十萬之師、決勝千里之外乎、兵連禍結、延及多年、糜餉勞師、卒無成效、日本豈不得思也哉、況日本觀于中法之戰、所以翻然變計、不允所請、則必開戰于天津、

斷不啓釁于朝鮮、譬如有兩人鬪、此人只攘其外衣、彼不過整理而已、必至打其頭一擊、胸、方爲得計、而對敵者、或如願順、否則喚力而無便益、日本之欲開戰、情形彷彿猶是也、夫此論既脫稿、而日使適來、遂將此意探問之、日使應聲曰、然、我不欲朝鮮土地一步也、我亦不欲屬諸人以邊防故、而需清國撤兵、今我派使前赴北京、著來、可望和議有成、卽或兩情決裂棄玉帛、而修戈矛、我兵勢必以天津而交鋒、斷不就王城爲戰地、那時住京兩國軍士、自必營屯相距脩遠、靜聽消息、無得妄動、或清兵而移紫馬山、而日兵亦撤于仁川、烏有率爾尋衅于和約之朝鮮國中者乎、我日本必不先出於此也、於是、更持禁地之法、而言于日使、日使曰、此法亦頗良美、朝鮮可以無事、三國不致公文爭、想我日本亦所願也、且大使井上馨在朝鮮日、間曾談及、以爲、此法甚妙、杞人但願先行其言、而後從之者也、遇見朝鮮、此時亟宜束手傍觀、若清日兩國開戰、而於朝鮮無事、卽如清法開戰、而朝鮮無事一樣、今有人、曰、朝鮮目下請清國添兵來、果有其事、便是辨錯耳、若清既允添兵、日本亦易添兵、兩國紛々、重兵壓境、將一定帶累朝鮮國、既朝鮮不欲清日以國中爲戰地、塗炭生靈、應請清國不添兵、暫且亦不撤兵、照常安屯、向在王城三營、馬山一營、是國王早請清國、派采保護、今可以仍照常保護、他國方無說話、若添兵、或調馬山一營來城、他國卽有話了說了、朝鮮與清、原非一國、從前與英德



美日各國一約朝鮮曰、朝鮮自主之國、清國與他國一戰、他國不能下來攻朝鮮、而奪土地、清國並不問朝鮮、請幫助、所以此次清日如有戰爭、朝鮮自亦不用派兵幫助清國、其實可以袖手傍觀、如今所<sub>レ</sub>在朝鮮清兵、保護國王、防禦內亂、已足用矣、於日本國亦不用防也、抑不應防、不用防者、何也、蓋日本儘不想來朝鮮、佔土地一步、去年、已重修和好、只想通商之益處、不應防者、何、清國不應在朝鮮而防日本、不然、日本可到朝鮮攻清兵、朝鮮自預備兵、自防各國、實是應行之事、他國不應談論也、按萬國公法、兩國開戰、他國不幫助此國、亦不幫助彼國、此兩國自不能爲難他國及民人、現在朝鮮所<sub>レ</sub>危險者、此間、王城知道清日實已開戰、惟恐駐紮王城清日之兵、偶然相見以干戈、而國中人民、趨勢動手、若國人趨勢動手、自於朝鮮、更有大禍、所以最要防者、不使國人動手、急應開導他門<sub>ニ</sub>縱清日有攻打事、於爾等不相干涉、切勿附會招災、而政府抑亦可與清日商量、曰、兩國尙未<sub>レ</sub>悅和、暫將兵營離去、清則去馬山、日則去仁川、免致兵戎相見、蹂躪京城之慮、仍中國立即欲撤兵、自己要用、朝鮮不應請留、而朝鮮此時、別無可防、防在內訌、然亦可用中國兵士保護國家、若清國欲在王城照常保護、亦聽其便、不過請其照舊有<sub>レ</sub>規畫、不用改花樣耳、以上寸話、舌削唇焦、只是勸朝鮮國、目下點不能動手、不請清國添兵、爲要

## 宮島誠一郎與黎公使筆話

### 一月七日黎庶昌筆談

誠曰、新年來無甚佳事

黎曰、新年無甚奇聞、惟中法之事、前據北洋及各處電報、俱言山西失陷、而前日貴國新聞所載、只言失去二壘、其城似又尙在、究未知何者爲確、今日得余理事瓊廣東來信、言敵曆十一月十四一戰、法軍幾至全覆、言人人殊、未知以何爲準、誠曰山西之事僕亦同想、但東京之形勢、以北寧爲第一要害、此城不亡、則安南之事可喜、僕不知北寧兵食充足、果可挫法軍否、

黎曰、北寧實有敵國兵萬五千人、帶兵統領駐彼已大半年、經營想必周備、法兵即攻、僕想未必即能得乎、

又曰、法人率陸兵、而攻北寧、如不能拔、則轉行海軍、攻廣東天津必矣、



誠曰、法已竭陸軍之力、而又耗海軍、亞洲之形勢於是乎成矣、  
黎曰、中法從今拮抗、又復一年、中兵假令不勝、又當必有新得、

明治十七年一月二十二日

宮島誠一郎 手記⑩

### 伊藤外務卿殿

在東京黎公使ヨリ井上外務卿、清佛  
啓釁通報並局外中立案ヲ請フノ照會

### 大清欽差大臣黎

照會事、照得、本大臣接ニ我  
總理衙門電報、現在法人開ノ釁、攻ニ毀閩省船廠、希下即知ニ會  
外部、務請按ニ照公法、不レ得一接ニ濟法人軍火煤斤一切物件、等因前來、查法人無狀、其情形  
久在ニ貴政府洞鑒之中、無レ庸ニ贅述、今與ニ我國戰爭方始、相應ニ錄ノ電照ニ會  
貴外務卿、請ニ煩查照、務希  
貴國按ニ照公法、局外中立、明飭各地方、禁止接ニ濟法人軍火煤斤一切物件、用符ニ修好條規  
第二條、一經ニ知照、必須彼此相助之誼、仍希ニ示復、爲ニ荷、須ニ至照會者、

右 照 會

在東京黎公使ヨリ井上外務卿清佛啓釁通報並局外中立案ヲ請フノ照會



大日本國外務卿伯爵井上

光緒十年七月初十日

英代理公使へ往簡案

本月三十日附貴簡落手披見致シ候、陳ハ清國ニ在留スル各中立國ノ人民及ビ財産ヲ保護センガ爲メ、英獨米及我政府ニ於テ共同戮力シ、非常ノ場合ニ備ヘ候儀ニ關シ、亞細亞屯在ノ貴國艦隊水師指揮提督ノ發議ヲ我政府ヘ御通告ノ爲メ御申越ノ越承知致候。

水師提督ウキルス氏ノ發議ニ據レバ、清國公衆ノ感覺並ニ清佛兩國間ノ關係切迫ナルヨリ、清國開港場ニ於テ清國人ハ是ガ爲メニ自然外國人ヲ敵視スル事情モ有之候故、御指名ノ各中立國ヨリ上海ヘ軍艦ヲ碇泊セシメント御思考有之候ニ付、此目的ヲ達セン爲メ、我政府ハ軍艦ヲ上海ニ派遣スルノ用意アルヤ否ヤ、貴下ニ於テ御承知相成度旨御陳述有之候。我交際官並ニ領事館ヨリハ清國人ノ外國人ヲ特ニ甚シク敵視スル形狀アルコトニ付テハ未ダ報知ハ無之候得共水師提督ウキルス氏ノ意見ニテハ、本議ヲ必要ト認メラレ候ニ付キ、同氏ノ意見ニ據リ當方ニ於テモ相當ノ訓令ヲ下シ我軍艦ヲ上海ニ派遣スルノ準備致ス可ク候。去リナガラ各國ノ海軍指揮官ヘハ然可ク同一ノ訓令ヲ下シ候方甚ダ要用ト被存候ニ付、本件ニ關シ貴政府ヨリ貴國海軍



指揮長官へ達セラレ候訓令ヲ御通知有之度御依頼ニ及ビ候。此段得貴意候。

敬具

## 佛國公使ヨリ

### 佛清啓釁ニ付戰時禁制品

#### 并局外中立ヲ請來ルニ付上申

本邦駐劄佛國公使ヨリ昨九日別書申候寫ノ通り、今後佛國軍艦ハ海洋ニ於テ中立國ノ船舶ヲ監視シ、清國ニ輸スル所ノ戰時禁制品ヲ捕獲スルノ權利ヲ執行スルコト、及我邦ニ於テ局外中立ヲ布告スル場合ニ於テ、佛國外務卿ヨリ我公使蜂須賀侯ニ談話ニ及候要容之儀ニ付、別紙乙號之通り申越候。就而ハ我邦局外中立ヲ宣布スルノ時機ハ、清國ニ對スル關係ニ酌量シ、追而定メラルベキ事ト存候得共、假令之ヲ宣布セラル、モ、先年宇佛戰爭ノ際ニ執行致候先例之外ハ、嚴正ノ中立ハ施行難致ト存候。猶此儀ニ就而ハ廟議之御決定ヲ仰ギ候。此段及上申候也

明治十八年二月十日

佛國公使ヨリ佛清啓釁ニ付戰時禁制品並局外中立ヲ請來ルニ付上申



外務卿伯爵 井上馨

太政大臣 公爵 三條實美殿

(以下三頁削除)

# 佛清啓釁ニ付軍艦派遣ニ關シ仁 禮海軍少將へ訓令案附關係書類

## 訓令案

海軍少將 仁禮景範

今般政府ハ英國政府ノ發議ニ依リ、英米獨三ヶ國ト共ニ軍艦ヲ清國地方ニ派遣スルコトニ決定セリ。其目的ハ專ラ現下安南事件ニ關シ、清佛兩國ノ間將ニ平和ヲ失ハントスルノ形勢アルヲ以テ、萬一急變事アルニ至テハ、右四ヶ國へハ各其軍艦ヲ以テ清國ニ在留スル中立國ノ人民及財産ヲ保護スルニ在リ。因テ清國碇泊中右ノ場合ニ至ラバ、須ラク三ヶ國軍艦長ト商議シ、互ニ相協力シ以テ其目的ヲ達スルコトヲ務ムベシ。

一、右清佛兩國開戦ノ時期ニ際會セバ、我軍艦ハ堅ク中立國ノ條規ヲ守リ、毫モ兩國ノ兵事ニ干渉ス可カラズ。

右條々及訓示候也。

月 日

佛清啓釁ニ付軍艦派遣ニ關シ仁禮海軍少將へ訓令案附關係書類



## 太政大臣

## 仁禮少將へ内訓案

今般清國へ派遣相成候要旨ハ、既ニ政府ヨリ付與セラレタル訓條ニ記載有之候ヘドモ、猶右ノ個條内訓ニ及ビ候。

一、安南事件ニ付、清佛兩國ノ葛籐結デ解クベカラザルノ勢アルヲ以テ、英政府ハ夙ニ中立例規ヲ守リ、我國及ビ他ノ中立國ト共ニ協同戮力シテ、以テ清國在留各外國（日英米獨）人民及其財産ヲ保護スルヲ肝要ナリトシ、同國代理公使ヲ以テ客歲十二月七日附別紙甲號書簡ヲ差越シ我政府ノ意見ヲ問ハシメタリ。我政府ノ見込モ亦素ヨリ中立ヲ確守スルニ在レバ、別紙乙號ノ如ク我政府同意ヲ表スル旨ヲ答ヘタリ。然レドモ當時ノ形勢ガ未ダ以テ我軍艦ヲ派遣スルノ時機ニ至ラザラン。之ニ續テ英代理公使ハ同十二月三十一日附丙號書簡ヲ以テ、同國亞西亞艦隊水師提督ウキルス氏ノ發議ヲ通知セリ。其大意ハ清佛兩國ノ關係日益ニ切迫ニ赴キ、爲メニ清國ノ人心ヲ激動シ、自我開港場ニ在ル他ノ外國人ヲモ敵視スルノ形情アルハ、英米獨及日本國ハ同ジク軍艦ヲ上海ニ碇泊セシメ、各其人民財産ヲ協力保護スルノ準備ヲナサント欲スルニ在リ

我政府ハ清國人ニ於テ果シテ如此事情アルヤ否ハ未ダ我公使及領事ヨリノ公報ニ接セズト雖モ前日乙號回答ノ旨趣ニ基キ、英國水師提督ノ發議ヲ可トシ、遂ニ軍艦ヲ派遣スルニ決シ、丁號ノ通り返答ヲ爲スニ至レリ。

蓋シ我軍艦ヲ清國開港場ニ碇泊セシムルハ、各條約第十四條ニ明文アリ。（兩國兵船往來指定各國係爲保護已國商民起見）毫モ清政府ニ於テ異議スベキモノニ非ラズ。

一、右ノ次第ナルニ依リ、我政府ハ始終中立ヲ確守シ、各中立國ト進退同轍ニ歸スルヲ目的トスレバ、百事英米獨ノ三國軍艦長官ト協議シ、緩急從事セラルベシト雖モ、萬一右三ヶ國ノ協議ニ依リ、兵力ヲ用ヒザル可ラザルノ機ニ至テハ、速カニ暗號電信ヲ以テ委詳其事由ヲ報道シ政府ノ認可ヲ得ラルベシ。

一、貴官清國碇泊中ハ、能ク清國政府佛國人民ニ對スルノ處置、及ビ同政府ガ各中立國人民ヲ待ツノ舉動、其用兵ノ形情及同國人民ノ動靜等ヲ察シ、旁々各國ノ情態ニ注意シ、時ニ之ヲ政府ニ電報シ又ハ書送セラルベシ。

一、碇泊中ハ清國在留我領事若クハ領事官ト常ニ氣脈ヲ通ジ、務メテノ協和ヲ旨トシ、機密ニ係ル各種ノ報告貴官ニテ差支ナシト認メラル、モノハ、成丈之ヲ展示シ、且北京在留ノ我公使館ヘハ前條ノ事情ヲ時々貴官ヨリ直接又ハ總領事ニ托シ電報セラルベシ。



一、凡ソ機密ニ係ル電信往復ハ、別冊暗號ヲ用ヒ、十分慎密ヲ加ヘ漏洩ノ惧ナキヲ要ス。  
一、此際ニ當リ貴官ノ最モ注意セラルベキハ、我ト清國トノ條約中左ノ二個條ナリ。右ハ其文字上彼我見解ヲ異ニスルノ慮リナキ能ハズ。故ニ茲ニ政府ノ意見ヲ附記シ以テ貴官ノ參考ニ備フ。

## 第二條

一、兩國好ミヲ通ゼシ上ハ、必ズ相關切ス。若シ他國ヨリ不公及輕藐スル事アル時其知ラセヲナサバ、何レモ互ニ相互助ケ或ヒハ中ニ入り、程克ク取扱ヒ友誼ヲ敦フスベシ。  
一、兩國既經通好自必互相關切若他國偶有不公及輕藐之事一經知照必須彼此相助或從中善爲調處以敦友誼。

本條ハ元來清國米利堅トノ條約第一款ノ例ニ習ヒ挿載セシモノタレドモ、相助ノ字義ニ關シ清國政府ニ在テハ或ハ謂ハン。佛國ヲ輕藐シ不公ヲ行フモノナリ。日本必ラズ我ヲ助クベク或ハ從中調處ヲナスベシ。然レドモ清佛兩國共ニ我友邦ニシテ、交誼ニ於テ親踈アルナシ。其偏黨スベカラザル素ヨリ不俟論。此場合ニ在テハ我國唯局外ニ中立スルノ一方アルノミ。況ンヤ孰レガ之ヲ輕藐シ、孰レガ之ヲ不公視セシ等ノ如キハ、中立國ノ敢テ判斷スベキモノニ非レバ

我政府ハ毫モ兩國ノ政事ニ關係スルナク局外ノ例規ヲ確守シ、以テ從來保續セル兩國ノ交誼ヲ完全スルヲ目的トス。

## 第十五條

此後兩國若シ別國ト兵ヲ用ユル事アルニ付、防禦致スベキ各港ニ於テ布告ヲナサバ、暫ク貿易竝ニ船隻ノ出入ヲ差止め、誤テ傷損ヲ受ケザラシムベシ。又平時ニ於テ大日本ハ大清ノ開港場及ビ最寄ノ海上、大清人ハ大日本ノ開港場及最寄ノ海上ニテ、何レモ不和ノ國ト互ニ爭鬪搶劫スル事ヲ許サズ。

嗣後兩國倘有與別國用兵情事應防各口岸一岸一徑布知便應暫停貿易及船隻出入免致誤有傷損其平時大日本人在大清指定々岸及附近洋面大清人在大日本指定々岸及附近洋面均不誰丐不知之國互相爭鬪搶劫

此條上半節ハ、敵ヲ受クル一國ノ各沿岸ハ敵國ノ戰艦ヲ防禦スル爲メ、一時局外國ノ貿易竝ニ船舶ノ出入ヲ停止セザルヲ得ズ。是ハ混雜中誤テ友國ノ船貨ニ傷損ヲ及ボサルノ用意ニシテ、只本國ニ敵ヲ引定ケ戰爭スル時間ヲ指セリ。下半節ハ之ニ反シ、本國太平無事ノ日、其沿岸及近海ニ於テ友國ノ人ガ、其敵タル一國ノ人ト爭鬪スルヲ禁ジタルナリ。譬ヘバ清佛設シ兵ヲ構ヘ、支那ニテ開戦シタランニ、我橫濱等ノ各港及近海ニ在ル清國人ハ、佛人ヲ敵ナリトシ



争鬪ヲ爲シ船貨ヲ搶劫スベカラザルヲ謂フナリ。  
 一、第二條第十五條ニ付テ政府ノ意見如何ト雖モ、萬一清政府ニ於テ是等ノ個條ヲ引用シ、援  
 ヲ我ニ責ルカ又ハ我人民居留地ヲ引退セシメントノ發議アルカ、或ハ條約上ニ關スル疑問アル  
 トキハ、貴官ハ唯本國政府ノ命令ヲ奉ジ自國ノ人民財産ヲ保護スルニ止ルノ旨ヲ述ベ彼政府ヨ  
 リ直チニ我政府ヘ照會スベシトノ意ヲ以テ決答シ、此種ノ論題ハ總テ之ヲ外交上ノ談判ニ讓ル  
 事トシ、貴官ニ於テ干涉セラレザルヲ可トス。  
 右及内訓候也。

月 日

外務卿

海軍卿

追而別紙修好條規注釋參考ノ爲メニ此ニ付添ス

(一頁削除)



### 英代理公使へ回答譯

本月七日附貴簡落手披見致候。陳ハ清佛兩國間ノ關係切迫ニ付、中立國人民保護ノ爲メ、貴國並ニ其他中立國軍艦ト共同戮力セシムルタメ、我政府ヨリ在支那海我指揮官ニ訓令ヲ下スベキ様内密御發議可相成旨、貴國外務卿ヨリ電令御領收相成候趣御通知相成、就テハ本件ニ關スル我政府ノ意向並ニ右共同戮力ノ目的ヲ達センガ爲メ、在支那海我指揮官長へ我政府ヨリ如何ナル訓令ヲ發スベキ哉、貴國政府ニ於テ御承知相成度ニ付、此儀貴下へ御通報及ブベキ旨御依頼ノ趣承知致シ候。在清中立國民ヲ共同シテ保護スル爲メノ貴政府發議ハ、我政府ノ充分ニ御同意賛成スル所ニ有之候間、支那海へ軍艦ヲ派遣セザルヲ得ザル場合ニ於テハ、貴簡中ニ御陳述ノ發議ニ適合スベキ訓令ヲ指揮官長ニ下スベク候間、此段取急ギ御回答及ビ候ニ付、此意味ニテ我政府ノ意向ヲ貴政府へ内密御通知有之候様致希望候、此段得貴意候。 敬 具

一千八百八十三年十二月八日

在東京外務省ニ於テ

外務卿 井上 馨

英代理公使

ビー・ル・ホーエル・トレンチ貴下



候コト故、日本ノ軍艦ヲモ彼地へ碇泊セシメ、他國ノ軍艦ト共同戮力シテ各自ノ國民ヲ保護スルコトヲ要用ト御思考アラシコトヲ希望候ニ付、此儀ヲ貴政府へ御通知ノ爲メ、拙者ヨリ閣下へ申進ズ可キ旨、該水師提督ヨリ依頼有之候。右水師提督ウキルス氏發議ノ目的ヲ施行スル爲メ、貴政府ニ於テハ上海へ軍艦ヲ御派遣可相成御用意有之候哉。否。閣下ヨリ御都合次第速ニ御報知相成候ハ、幸ノ至ニ存候。此段得貴意候。

敬具

一千八百八十三年十二月三十一日

在東京英國公使館ニ於テ

ピー・ル・ホエール・トレンチ

外務卿代理 伊藤博文殿

英國代理公使へ往簡

本月三十一日附貴簡落手披見致シ候。陳者清國ニ在留スル各國中立國ノ人民及財産ヲ保護セシメ、英米獨及我政府ニ於テ共同戮力シテ非常ノ場合ニ備へ候義ニ關シ、亞細亞屯在ノ貴

國艦隊水師提督ノ發議ヲ我政府へ御通知ノ爲メ御申越ノ趣承知致候。

水師提督ウキルス氏ノ發議ニ據レバ、清國公衆ノ感覺並ニ清佛兩國間ノ關係切迫ナルヨリ、清國開港場ニ於テ清國人ハ之レガ爲メニ自然外國人ヲ敵視スル事情モ有之候故、御指名ノ各中立國ヨリ上海へ軍艦ヲ碇泊セシメント御思考有之候ニ付、此目的ヲ達セン爲メ我政府ハ軍艦ヲ上海ニ派遣スルノ用意アルヤ否ヤ、貴下ニ於テ御承知相成度旨御陳述有之候。

在清我領事官ヨリ得ル處ノ報告ニ依テ相考候得バ、目下急變ノ差起候患モ無之候様被存候、去ナガラ要用ト認めラルベキ處置ニ付テハ、貴國政府ト協力致度、且ツ御指名ノ各國協同戮力ノ發議ニ同意スル目的ハ、止ムヲ得ザル場合ニ於テハ清國在留中立國民ノ身命財産ヲ保護スルニ外ナラザル儀ト心得候ニ付、我政府ニ於テハ速ニ相當ノ訓令ヲ下シ、上海へ一隻或ハ數隻ノ軍艦ヲ碇泊セシムベキ準備ヲナスコト決定致候。尤我國政府ハ豫メ此處分ヲ爲スニ於テモ、前述ノ如ク穩當ナル報告ノ趣モ有之候ニ付キ、水師提督ウキルス氏ノ發意ヲ實施スル時機如何ハ今後ノ報告ニ依リ我政府ニ於テ之ヲ決定致ス可ク候。前述各國海軍指揮官へ可成同一ノ訓令ヲ發シ候方必要ト存セラレ候ニ付、右協同戮力ノ目的ニ關シ、貴政府ニ於テ貴國海軍指揮官へ達セラレ候訓令ノ性質及區域ヲ可成詳細ニ御報告有之度希望致候。且又獨米ノ政府ハ右ノ發議ニ隨ヒ、實際何等ノ處分ヲ既ニ施シ候哉、此儀モ亦御報知有之度希望致候。此段得貴意候



敬具

明治十七年一月十一日

外務卿代理 參議 伊藤 博文

英國代理公使 ピル・ポヘル・トレンチ貴殿

修好條規註譯

第二條

兩國既經通好、自必互相關切。若外國、偶有不公、及輕藐之事。一經知照、必須彼此相助。或、從中善爲調處、以敦友誼。

○兩國(日本ト支那トヲ指シテ云フ)○通好(使ヲ通シ好ヲ結ブ)○關切(友誼ヲ心ニ懸ケ深切ニ相交ハル)○他國(日本支那ノ他ニ一國ヲ指テ云フ)○不公(已ニ利ヲ損ヲ顧ミザルノ類)○輕藐(暴威ヲ逞クシ、人權體面ヲ小看厭服セント欲スルノ類)○知照(此事ヲ彼ニ知ラセ心得シムルナリ照知ハ、照會シ知ラスル義トス)○調處(調ハシラベ處ハ居クナリ、兩人間ノ爭論不和ヲ調停復好セシムルノ義、譬ヘバ、琴韻ノ和協ヲ失ヘル時、絃柱ヲ上ゲ下ゲシ、中央竅要ノ處ニ停止スレバ、始メテ音律各其正シキニ從フカキヲ云フ)

日本ト支那トノ間ニ友好ヲ結ビシ上ハ、双方深切ニ相交ハルハ申迄モナク、萬一他ノ國ヨリ(日本ガ支那ニ向テ)公平ノ道ニ背クコトヲ爲シ、又ハ威逼挾制ヲ行フ者アリシ時、其事ノ報告ヲ得タル一

方(日本ナリ支那ナリ)ハ必ズ爲メニ應分ノ心ヲ盡シ、(他ノ國日本ニ支那ヨリ)向ヒシ時ハ(支那ヨリ日本ヨリ)其間ニ立入り場合ニ因テ專ラ和順ノ周旋ヲ爲シ、双方共ニ友愛ノ情誼ヲ篤クスベシ。

右此條ハ、原ト清米條第一款ヲ取り加ヘタル者ニテ、字句概ネ同ジ、即如左、  
若 他 國 有 何 不 公 輕 藐 之 事。 必 須 下 一 相 一 助

If any other nation should act unjustice or oppressively, the United states will exert their good office son being informed of the case to bring about an amicable arrange-

ment of the question thus showing their feverdly feeling. 友 誼 關 切

米人此約ハ偏ニ清國ニ對シ其友誼ヲ表シタルニ、李鴻章ハ此修好條規ニ於テ、能ク善隣相關ノ約ヲ爲シ、以テ兩國友誼ノ親密ハ他ニ比類ナキヲ示スニ足レリト、皇上ノ獎旨ヲ承ケシ由、自ラ誇リタリキ、然レドモ我欽使復命ノ後、此文中ニ相助ノ二字アルヲ見テ、或ハ兵力ヲ以テ相助クル事ノ様ニ疑ヒ、此條ヲ删除スベキノ議起レルニ因テ、明治四年約成リ、五年批准交換スベキヲ、朝廷使ヲ派シ、李鴻章ニ删除ヲ談及セラレシニ、彼聽カズ、且曰ク、中國米人ト約セルハ、曾テ彼ガ兵力ノ助ヲ仰ギシニ非ズ、彼遠洋ニ在テ、且此友誼ヲ表ス、況ヤ緊隣相交ルニ、豈此條無ル可シヤト、六年遂ニ原約ヲ交換セリ。

佛清啟釐ニ付運糧派遣ニ關シ仁禮海軍少將へ訓令案附關係書類



第十四條

兩國兵船、往來指定各口、係爲保護已國商民起見。凡沿海未經指定口岸、以及內地河、湖、支港、概不准駛入。違者、截留議罰。惟因遭風避險收口者、不在此例。

日本支那ノ軍艦、兩國ノ内互ニ指シ定メタル開港場ニ航通スルハ、其地ヘ貿易ニ來リタル自國ノ商民ヲ保護スル爲メノ旨趣タリ。然レバ都テ此他ノ未ダ通商ヲ開カザル港岸、及ビ内地河筋、湖水、小湊ヘハ、一切船ヲ寄スルヲ准ルサズ。此約ニ背ク者ハ、其船ヲ到リシ處ニ押ヘ留メテ罰金ヲ取ルベシ。但タ風波ノ危險ヲ避ルニ因テ一時入港セル者ハ此例ニ在ラズ。

第十五條

嗣後兩國、倘有與別國用兵情事、應防各口岸。一經布知、便應暫停貿易、及船隻出入、免致誤有傷損。其平時。大日本人、在大清指定口岸。及附近洋面。大清人、在大日本指定口岸、及附近洋面。均不准與不和之國、互相爭鬪槍劫。

○嗣後(修好締盟ヨリ後ヲ謂フ)○倘(日本カ支那ノ内一方ヲ指ス)○防(其門戸ヲ固メテ敵船ヲ禦クナリ)○便(布告ニ隨ヒテ直チニナリ)○平時(戰時ノ反對ニシテ平生平日ナド、云ヘル者ト大ニ異ナレリ即チ王充論衡ニ太平之時ト云ヘル語ヨリ出テタルナラン)

此後日本支那兩國ノ内、孰レカ他ノ一國ト開戦スル事アラバ、各開港場ハ敵船ノ來ルヲ防禦スベケレバ此布告アリシ時ハ、暫時友國ノ貿易、及ビ其船ノ出入ヲ停止シ、混雜中ニ誤テ傷損ヲ受ケ

ザラシムベシ。但ダ兩國ノ内一方、他國トノ間、平和無事ノ時。日本人、支那ノ開港場、及ビ近傍ノ海上ニ在リ。支那人、日本ノ開港場、及ビ近傍ノ海上ニ在テハ。孰レモ其敵國ノ人ト、互ニ戰爭ヲ開キ、船舶貨物ヲ捕拏スル等ノ事アルヲ准ルサズ。此文上半節ハ、敵ヲ受クル一國ノ各港岸ハ、敵國ノ戰艦ヲ防禦スル爲メ、一時局外ノ貿易、並ニ船舶ノ出入ヲ停止セザルヲ得ズ、是ハ混雜中、誤テ友國ノ船貨ニ傷損ヲ及ボサ、ルノ用意ニシテ、只本國ニ敵ヲ引受ケ戰爭スル時間ヲ指セリ。

下半節ニ至テハ、反之、本國太平無事ノ日、其港岸及ビ近海ニ於テ、友國ノ人ガ其敵タル一國ノ人ト爭鬪スルヲ禁ジタルナリ。譬ヘバ、清佛設シ兵ヲ構ヘ、支那ニテ開戦シタランニ、我横濱等ノ各港、及近海ニ在ル清國人ハ、佛人ヲ敵ナリ迎、爭鬪ヲ爲シ、其船貨ヲ分捕スルコト能ハザルヲ謂ヒシ也。



## トリクー氏ノ話

## 安藤領事電報

十七年十月五日午前七時五十五分發

水師提督クルベール氏ヨリ電報ヲ只今接手セリ。云フ同氏ハ去ル三十日雞籠ニ到着シ、翌一日レントクレメント山ニ向テ攻撃ヲ始メ、其西部ノ二塞ヲ拔キ、之ヲ占有セリ。尤モ上陸ノ時ヲ除クノ外ハ甚ダシキ抵抗ハナカリキ。本月四日其東部ノ二塞ニ向テ攻撃ヲ爲スノ筈ナリ。此役佛兵死者四名傷者十餘名、而シテ清兵ハ死傷百數名ナリトノ事ナリ。水師提督「レスビー」氏ハ淡水ニ向テ攻撃ヲ爲シタル筈ナリ。其結果未ダ詳ナラズ。以上ノ報ハ在上海佛國總領事ニ於テ充分保證スル處ナリ。

同前 同日午後六時十分發

在上海佛國總領事ヨリ只今左ノ電報ヲ拙官ヘ付與シタリ。云フ水師提督「クルベール」氏ハ四日ニ於テ東南ノ堡塞ヲ占有シ、抗敵スル者ナシ。是ニ於テ佛兵ハ雞籠ノ諸塞ヲ悉ク所有セリ。



又「レスビー」氏ハ淡水ニ於テ已ニ諸砲臺ヲ破壊シ、現ニ支那船及水雷火ヲ破却スルコトヲ始メ  
タリ云々。

### 在上海安藤領事電報和譯

フエレー氏ハ開戰公告セシニアラズト辨ジタリト云フ。本月十二日ノ「リユータル」電報ハ本  
地ノ佛國總領事ニ於テ之ヲ證明セリ。(右十七年九月十五日發)

吳淞封口ノ件ニ關シ、當地ノ人心大ニ騷擾セリ。是ニ於テ各領事ハ電信ヲ兩江總督曾國荃ニ  
送り、該件ヲ再考センコトヲ求メタリ。此際封口ノ工業ハ中止セリ。(右十七年九月十五日午  
後七時發)

本日當地ニ於テ居留各外國人集會シテ左ノ議ヲ提出セリ。乃チ締盟各國ヲ連合シテ、清佛兩  
國ニ向テ調停ヲ爲サンコトヲ英獨米ノ三國政府ニ訴求シ、而シテ此旨ヲ右三國ノ商法會議所ニ  
電報シ其努力ヲ請フベシ云々。(右十七年九月十六日午後六時二十六分發)

### 在北京榎本公使電報和譯

形勢依然替ルコトナシ。佛公使ハ福州事件ノ後、曾國荃ニ向テ重ネテ償金ノ談判ニ及ビタレ  
ドモ其効ナカリキ。

佛國ニテハ來春前ニ北京ヲ攻撃ノ爲メ、三萬許ノ兵ヲ派スルコトハ出來ベカラザルコトニテ  
清國ニ於テモ右佛兵ノ來ルニ先ツテ、東京ヲ再ビ取ルコトモ亦行ハレ難シ。當地在留各國公使  
間ノ說ニ據レバ、目下ノ處ニテハ清國ニ於テモ佛國ニ於テモ、將來何等ノ結局ニ至ルベキカ定  
見ナキモノ、如シト。又、孰レノ締盟國モ調停ヲ試ムル模様ナシ。獨リ米國公使ノミ數日前佛  
公使ニ電信ヲ送りタリ。其趣意ハ多分海南島ヲ以テ償金ニ代フルノ議ニ付テ、佛公使ノ意見ヲ  
探グル爲ナラン。然レドモ拙官ノ考ニテハ此議ハ清國ニ於テ受付ケザルベシ。

右十七年九月十五日午後七時五十分發

### 在香港町田領事電報和譯

佛國甲鐵艦「アトランタ」號ハ「ガリソニエル」艦ガ當地ニ於テ修復シタル間、之ガ爲メ本日東  
京ヨリ到着シタリ。而シテ明日雞籠ニ向テ拔錨シ「クールベ」提督ノ艦隊ニ加ハル筈ナリ。

右十七年九月十五日午後五時二十五分發



局外中立勅旨案 附太政大臣ヨリ達

朕ハ各國ト平和ノ慶ヲ有スルニ當リ、今不幸ニシテ佛蘭西國ト清國トノ間ニ交戦ヲ開クニ遇ヘリ。朕素ヨリ兩交戦國ト均シク同盟和親ノ交誼ヲ全クシ、並ニ朕ガ臣民ヲシテ平和ノ幸福ヲ保タシメンコトヲ欲シ、兩國ノ交戦ニ於テ斷ジテ嚴正不偏ノ局外中立ヲ取ルニ決定セリ。

國ノ内外ニ在朕ガ臣民ハ、宜シク朕ガ意ヲ體シ、各自警戒シ、直接ニ又ハ間接ニ兩國ノ交戦ニ干與スルコト勿ク、而テ此勅旨ニ依リ發布セシムル所ノ局外中立規則、並ニ本件ニ關スル萬國公法ノ例規ヲ犯スコトアルベカラズ。

朕ガ文武ノ臣僚ハ、朕ガ此旨ヲ欽ミ、規則並ニ萬國公法ノ例規ヲ遵守シ、各其職權ニ應ジテ之ヲ遵守セシムベシ。

朕ガ臣民若シ兩交戦國ニ於テ適當ニ且ツ有効ニ施行シタル封港ヲ破リ、或ハ破ラントシ、若クハ兩交戦國ノ用ニ供スルタメ士官兵卒書信軍器軍需及ビ其他萬國公法或ハ近代ノ慣例ニ照シ戦時禁制品ト認ムベキ物品ヲ運送スルニ於テハ、其犯人ハ船舶貨物ト共ニ捕獲セラル、ハ當然ニシテ、猶萬國公法ノ例規ニ依リ處罰ヲ受クベキモノナリ。右等違犯ノ處業ハ自ラ危険ヲ冒ス

モノナルヲ以テ、其捕獲處罰ヲ受クルニ至ルモ亦朕ガ保護ヲ求ルコト能ハザルベシ。

凡ソ何等ノ權利ニ拘ラズ、我ガ港口海濱海上其他我が版圖内ニ於テ、兩交戦國ノ一方若シクハ其人民ニ付與スル外ノモノハ、同一ノ區域ニ於テ均シク又之ヲ他ノ一方若シクハ其人民ニ付與スベシ。特ニ茲ニ之ヲ宣告ス。

御名 玉璽

右 奉 勅



## 局外中立ニ付太政大臣ヨリ達

清佛兩國交戰中局外中立ヲ保持スル爲メ陸軍海軍及ビ府縣稅關其他行政官吏ヘノ達。

本年 月 日第 號ヲ以テ局外中立ノ勅旨被仰出候ニ付各心得ノ爲メ別紙相達候事

今般清佛國交戰中我

天皇陛下ハ嚴正不偏ノ局外中立ノ義務ヲ被爲執旨被仰出候ニ付、兩交戰國現實戰鬪ノ間、戰國ノ諸軍艦ハ我ガ版圖内ノ港口其他ノ海上ヲ以テ、戰用ノ屯所若クハ根據ト爲シ、又ハ軍需ヲ供給スルノ地ト爲スコトヲ被禁候。

兩交戰國ノ船舶ハ我ガ版圖内ノ港口及ビ海上ニ於テ相當ノ待遇ヲ受ケ繫泊スルヲ得、而シテ軍備ニ關セザル必要ノ修理ヲ加ヘ、且ツ戰爭ニ用ヒザル所ノ必要ノ需用品及ビ食料ヲ供給スルコトヲ得ベシ。但今般宣布ノ

聖旨及ビ前顯禁令ノ主意ニ違反シ、斯ク許與スル處ノ特典ヲ濫用スルコト莫キヲ要ス。右需用品

ニ關シ兩交戰國ノ兵船我管轄ノ港口若クハ海上ニ在ルニ方リテハ、其乗組人ノ生活ニ必要ノ食物等及ビ最近ノ自國管轄ノ港灣ニ達スル迄ノ間ニ充分ナル丈ケノ石炭ヲ除クノ外ハ、一切ノ品物ヲ供給スルコトヲ許サザルモノナリ。而シテ我管轄ノ海上ニ在ル交戰國兵船ニ一タビ石炭ヲ供給シタルニ於テハ、其後三ヶ月ヲ經過セザレバ同兵船ハ我管轄ノ港口若クハ海上ニ在テ再ビ供給ヲ得ザルベシ。但シ特別ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限りニアラズ。

兩交戰國ノ軍艦ニシテ、我管轄ノ港口其他ノ海上ニ入來リ、或ハ停泊シ 一方交戰國ノ船舶（軍艦ト商船トニ拘ラズ）右港口或ヒハ海上若シクハ其近傍ニ在リテ出發スルトキハ、其出發シタル後少クトモ二十四時間ヲ經ルニ非ザレバ該軍艦ノ出發スルコトヲ許サザル可シ。然レドモ兩交戰國ノ軍艦ハ、一方交戰國ノ船舶出發ヲ僞リ、若クハ數艘引續キ出發スルトモ、第一次出發ヨリ起算シテ二十四時間以上我港口及海上ニ之ヲ抑留スル可カラズ。若シ兩交戰國ノ船舶同所ニ數艘有ル時ハ、其出發ノ順序ヲ定メ、交替ニ出發セシメ、成丈ケ此規則ノ目的ニ違ハザルヲ旨トシ、徒ラニ留置スルコトナカルベシ。但シ此ノ如キ場合ニ於テハ弱小ナル船舶ヲシテ強大ナルモノニ先チ出發セシムベシ。

一ノ交戰國ヨリ捕獲シタル總テノ戰時捕獲物ハ、我海上ヘ持來ルコトヲ許サズ。但シ其船舶修繕ノ爲メ或ハ暴風雨ノ節、或ハ乗組人食料需用ノ節來港スルハ此限りニアラズ。而シテ其來



港ノ船ハ不要ニ滞在スルヲ許サズ。其目的ヲ達シタル後ハ速カニ出發セシムベシ。

右ハ各官ニ於テ

聖旨ヲ奉行スル爲メ此達ノ旨ニ據リ、我港口及海上ノ局外中立ヲ維持スルニ適切ナル處分ヲ爲シ、且管下ノ諸官吏ニ指令シテ執行爲致、總テ前述ニ關スル事件ニ付テハ局外中立規則及ビ局外中立ニ關スル萬國公法ヲ遵守シテ行爲ヲ誤ルコト勿レ。

# 局外中立規則案

外務卿ヨリ各地方へ訓令

## 布告

第 號

年 月 日附ヲ以テ仰出サレタル局外中立ノ勅旨ニ基キ、左ノ通規則ヲ制定シ  
年 月 日ヨリ施行ス。此規則ハ後日別段ノ布告ヲ發スル迄ハ効力ヲ失ハザルモノトス  
奉勅旨布告候事。

## 規則

第一條 我臣民及ビ我版圖内ニ在ル人民ハ、局外中立ノ勅旨ニ違背シ、兩交戰國ノ陸海軍ニ任職又ハ使用セラル、コトヲ承認スルコト、若クハ承諾スルノ約定ヲナスコト、若クハ承諾スルノ目的ヲ以テ船舶ニ乗組ムコトヲ禁ズ。但シ兩交戰國ノ人民一時我版圖内ニ在ルニ方リ、軍艦ノ我版圖内ニ到着スル前ニ於テ、既ニ軍艦ノ裝備ヲナシタルモノニ乗組ミ就役ス



ルハ此限ニアラズ。

第二條 我臣民及び我版圖内ニ在ル人民ハ、契約又ハ詐偽若クハ其他ノ手段ヲ以テ他人ヲ誘動シ、兩交戰國ノ陸海軍ニ任用セラル、コトヲ承諾セシメ、又ハ承諾スルノ約定ヲナサシメ又ハ承諾セシムルノ目的ヲ以テ船舶ニ乗組マシムルコトヲ禁ズ。

第三條 船舶ノ持主若クハ船長ニシテ我海上ニアル者ハ、前二個條ニ依リ違法トナルベキ兩交戰國ニ任用セラル、者ヲ乗組マセ、若クハ乗組マサルコトヲ約定シ、若クハ船舶ニ乗セ置クコトヲ禁ズ。

第四條 我臣民及び我版圖内ニ在ル人民ハ、兩交戰國ノ用ニ供セン爲メ船舶ヲ製造シ、或ハ船舶ニ軍器ヲ載セ、或ハ裝置シ、或ハ物料ヲ備給シ、或ハ艤裝スルコト、又ハ船舶ヲ製造セントシ、或ハ軍器ヲ載セントシ、或ハ裝置セントシ、或ハ物料ヲ供給セントシ、或ハ艤裝セントシ、又ハ他人ヲシテ船舶ヲ製造セシメ、若クハ軍器ヲ載セシメ、若クハ裝置セシメ、又ハ物料ヲ備給セシメ、若クハ艤裝セシメ、又ハ船舶ヲ製造シ軍器ヲ載セ、或ハ裝置シ、或ハ物料ヲ備給シ、或ハ艤裝スルコトヲ幫助シ、或ハ關係スルコトヲ禁ズ。

第五條 我臣民及び我版圖内ニ在ル人民ハ、兩交戰國所有ノ船舶若クハ兩交戰國ニ使用サル、所ノ船舶ニ裝置シアル砲銃ノ數ヲ増加スルコト、又ハ之ヲ取り代ユルコト、又ハ軍用ノ裝

具ヲ増加シテ總テ船舶ノ兵力ヲ増加シ、若クハ他人ヲシテ之ヲ増加シテ總テ船舶ノ兵力ヲ増加シ、若クハ他人ヲシテ之ヲ増加セシメ、若クハ之ヲ増加スルコトニ關係スルヲ禁ズ。

第六條 我臣民及び我版圖内ニ在ル人民ハ、兩交戰國ノ領地ニ向テ發スベキ陸海軍ノ進征ヲ准當シ、若クハ之ニ加ハリ其他之ニ關係スルコトヲ禁ズ。

第七條 前條々ヲ犯ス者ハ輕罪ヲ以テ論ジ、法律上定メタル所ノ刑罰ニ處セラルベシ。又第三條ヲ犯シタル場合ニ於テハ其船舶ハ公判ヲ終ル迄差留ムベシ。然シテ有罪ト決スルニ於テハ、該犯罪ニ付船長若クハ船主ニ科スル處ノ罰金裁判費用等總テ拂濟ミ迄差留メ、若クハ裁判所ノ満足スル充分ノ抵當ヲ出ス迄ハ差留ルコトアルベシ。又第四條及第六條ヲ犯シタル場合ニ於テハ、更ニ其犯罪ニ關スル船舶及び其裝具ヲ併セ、一切ノ軍器軍需等總テ沒收スベシ。第五條ノ場合ニ於テハ、其犯罪ニ關係スル砲礮、其他軍需ノ我版圖内ニ在ルモノハ外國ノ兵船上ニ在ルモノヲ除クノ外、一切之ヲ我政府ニ沒收スベシ。

第八條 總テ日本政府ノ行政官吏ハ、其陸軍、海軍、稅關又ハ警察又ハ地方官ニ論ナク、其上官ヨリ受クル所ノ適法ノ指令ニ從ヒ、此規則第一條ノ禁令ヲ犯シタル者ヲ捕拿シ拘留スルノ權アルベシ。且第三條ノ禁令ヲ犯シタル船舶及び此規則ノ諸禁令ニ背キテ其船舶上ニ在ル所ノ諸人ヲ併セテ之ヲ捕拿拘留スルノ權アルベシ。且第四條或ハ第六條ノ禁令ヲ犯シタ



ル一切ノ船舶ヲ捕拿拘留シ、第六條ノ場合ニ於テハ其船舶上ニ在ル所ノ諸人ヲ併セテ之ヲ捕拿拘留スルノ權アルベシ。但シ其犯罪ヲ成遂ゲタルト未ダ遂ゲザルトヲ問ハズ、右一切ノ捕拿拘留ヲ行フコトヲ得ベシ。且ツ前ニ掲ゲタル行政官吏ハ其上官ノ訓令ニ由リ、法ニ合シテ權力ヲ授ケラル、トキハ、上ノ條々ニ載セタル外一切ノ事ヲ行ヒ得ベシ。且右行政官吏ハ右等ノ捕拿拘留及ビ其他ノ事ヲ執行スル爲メニ相當ノ勢力ヲ用ユルヲ得ベシ。

第九條 各省ノ卿又ハ臨時ノ長官及ビ諸府縣或ハ諸港ノ長官、若シ此規則ノ禁令ニ對シテ罪ヲ犯シタル者、或ハ現ニ之ヲ犯ス者、或ハ特ニ之ヲ犯サントスル者アリト信ズベキ相當ノ理由アリト認ムルトキハ、之ヲ防止スル爲メ、此規則ニ服從スベキ船舶、造船場、鑄造場、製造場、工場及ビ其他ノ場所ニ對シテ、必要或ハ相當ト思料スル所ノ搜查令狀ヲ發シ搜查セシムベシ。

第十條 此規則ノ條款ニ據リ、船舶或ハ器物或ハ人ヲ捕拿拘留スルトキハ、其捕拿拘留ヲ行ヒタル行政官吏ハ直ニ其由ヲ其筋ヘ届出デ、而シテ遅延ナク其事件ヲ相當ノ裁判所ヘ引渡スベシ。其裁判所ハ直ニ其事件ノ審判ニ取掛リ、或ハ其場合ノ正當ナル便宜ニ應ジテ、一時若クハ其他ノ命令ヲ爲スベシ。

第十一條 行政官吏或ハ其他ノ官吏、又ハ正當ニ行政官ヲ代理スル者、又ハ此規則ヲ執行スル處ノ人ヲ助クル者ニシテ、相當ノ理由アリト眞實自信シテ職務ヲ執行スルニ必要ナル、或ハ當然ナル所爲ニ對シテハ、刑法上又ハ民法上ノ責ヲ受クルコトナカル可シ。

第十二條 兩交戰國人ハ其捕獲シタル處ノ船舶物品ヲ我ガ港口海濱海上、其他我ガ版圖内ニ齎來スルヲ禁ズ。但シ右船舶航海ニ堪ユル修覆ノ爲メ、大風其他總テ海上ノ危難ヲ避ケンガ爲メ、若シクハ其乗組人ノ生活ニ必要ノ物料ヲ求ムル爲メ來入スルハ此ノ限ニアラズ。尤モ其目的ヲ達シタル上ハ直チニ我ガ港口海濱海上其他我ガ版圖内ヨリ退去スベシ。

總テ我ガ港口海濱海上其他我ガ版圖内ニ於テ、前顯ノ船舶或ハ物品ヲ賣買シ、又ハ賣買セントスルコトヲ禁ズ。假令之ヲ賣買シ又ハ賣買セントスルモ凡テ無効タルベシ。

第十三條 若シ我國ノ局外中立ヲ破リ、其版圖内ニ於テ戰時捕物トシテ捕獲シタル一切ノ船舶物品、或ハ商品若クハ此規則ノ第四條、第五條、或ハ第六條ノ禁令ニ觸ル、所ノ諸船舶ガ捕獲シタル一切ノ船舶、物品或ハ商品ノ我ガ版圖内ニ於テ發見セラル、カ、又ハ其捕獲者或ハ其代理人或ハ其不法ノ捕物タルヲ知リナガラ、之ヲ自己ノ所有ト爲シテ其捕物ヲ我ガ版圖内ニ齎來セルトキハ右捕物ノ原所有者或ハ其代理人若クハ日本政府或ハ原所有者ノ本國政府ヨリ命ヲ受ケタルモノハ、該事件ニ就キ法權執行ヲ適當ニ有スル所ノ裁判所ニ出訴シ、其捕物ノ差押留置ヲ請求スルコト當然タルベシ。而シテ此法權執行ヲ適當ニ有スル所



ノ裁判所ニ於テハ、其事實ニ付正當ノ證明ヲ得タル上ハ其捕物ヲ原所有者ニ還付スベキ旨ヲ命ズベシ。

第十四條 日本政府ハ我が臣民及ビ其他我版圖内ニ在ル人民ガ、兩交戰國人ト尋常且ツ正當ノ貿易ヲ爲スコトヲ妨ゲズ。然レドモ日本政府局外中立ノ義務ヲ破ル處ノ貿易ヲナスベカラズ。

第十五條 此ノ規則ニ揭示スル所ノ沒收ノ件ハ、交戰國ト否トニ拘ラズ總テ外國兵船ニ交渉ナシ、且裁判所ニ向テ從前有セザル兵船ニ關スル裁判權ヲ付與スルノ意ニ非ズ。

## 局外中立ニ付外務卿ヨリ地方官へ訓令

今般清佛兩國開戰ニ付局外中立ノ勅旨被仰出、我政府ハ其局外中立規則ヲ頒布セリ。抑我國ノ地形ニ關係アル理由ニ據リ、日本政府暨ヒ臣民トモ嚴正不偏ノ局外中立ヲ遵守スルコト緊要ナリ。而シテ此局外中立ヲ保守センガ爲メ左ノ條目ヲ訓示ス、各府縣官其旨意ヲ熟知セザル可カラズ。然ルニ此ノ訓令ハ定限アリテ且大概ヲ示スモノニ由リ、各府縣官ハ局外中立國及ビ交戰國ノ諸權利義務ニ通曉スベキハ必要ニシテ職務ノ一部トス。其疑ハシキ事アラバ更ニ伺出ツ可シ。

今回ノ如キ近隣ノ國ニ交戰アルニ際シテハ、遠國ニテ交戰アル節必要トセラル、ヨリ、一層注意ヲ密ニシ、一層交戰國ノ權利ヲ尊敬シ、一層局外規則ノ執行ヲ嚴ニシ、且ツ一般ニ交戰國ヨリノ要求ヲ防ガンガ爲メ特ニ注意ヲ嚴ニセザル可カラズ。我臣民ニ在テハ一人タリトモ戰士ト爲リ、此ノ戰爭ニ加ハル者莫カル可シ。雖然苟モ斯ノ如キ者アルカ、又ハ我版圖内ニ於テ他人ヲ募リ以テ交戰國ノ陸海軍ニ加入セシメンコトヲ企ル者アル時ハ、則チ我官吏ハ之ヲ防止ス



ルノ方法ヲ直チニ取行フコトヲ本務トス。又我版圖内ニアル外國人ニシテ他人ヲ募集シ、又ハ之ヲ傭入シ、以テ交戰國ノ陸海軍ニ加入セシメンコトヲ企ル者アラバ、我官吏ハ直ニ之ヲ外務卿ニ報告シ、且ツ其外國人ヲ管轄スル領事官ニ報告シ、以テ我帝國ノ局外中立ヲ犯ス者ヲ防遏センコトヲ勗ムベシ。

交戰國ノ臣民ニシテ一時我版圖ニ在留スル者ハ、其國ノ軍艦ニ服役スル爲メ、艦内ニテ徵募セラル、コト自由タルベシ但シ。我國ニ着港ノ時既ニ軍艦タルノ艦装ヲ具ヘシモノニ限ル可シ然レドモ此特例ハ以テ夫ノ交戰國ノ臣民ヲ我海上ニ於テ陸軍服役ノ爲メニ徵集シ、又ハ運漕船若クハ商船中ニ徵募シテ、之ヲ海軍ニ服役セシムルコトヲ許ス者ニ非ズ。單ニ其軍艦内ノ服役ニ供スル爲メ、其艦内ニテ徵集スル者ニ限ル可シ。而シテ斯ク徵募シタル其臣民ヲ何等ノ役ニ使用スルモ我管轄外ノ地ニ輸送スルハ固ヨリ我レノ問フ所ニ非ズ。只我政府ニ在テハ勅旨及規則ニ抵觸セザルノ徵募ヲ爲スヤ否ヤヲ注視センコトヲ要スルノミ。

凡ソ局外中立國ノ版圖内ニ在ル中立國人又ハ交戰國人ニシテ、故意ニ交戰國ノ使用ニ供センガ爲メニ、躬カラ船舶ヲ艦装シ若クハ之ニ兵器ヲ備ヘ、又ハ其他此等ノ事件ニ關係スルハ萬國公法ノ許サバル所ナリ。是ヲ以テ各地方官吏ハ其人ヲ問ハズ、苟クモ我版圖内ノ港口及ビ海上ヲ斯ク不法ノ用途ニ使用スル者アルヤヲ視察スルハ其當務トス。

政府ノ趣意ハ純然タル商業ヲ禁ズルニ非ラズ。又我臣民ノ兩交戰國人ニ向テ其軍備艦装シタル船舶ヲ除クノ外ハ都テ一般ノ商品船舶又ハ凡テノ兵器等ヲ賣與スルノ權利ヲ否ムノ意ニ非ズト雖モ、若シ我國ノ管轄外ニ於テ都テ戰時禁制ノ物貨ヲ運賣スルコトヲ企ルトキハ、拿捕ニ遇ヒテ沒收セラル、ノ責ヲ負フベシ。其時ニ及ビ我政府ハ此ニ干渉シテ其沒收ヲ防止セザルナリ但シ我臣民及ビ其他ノ者、斯ク商賣權ヲ有スト雖モ、我 天皇陛下ノ管轄海内ニ在ル交戰國ノ軍艦ニ、兵器彈藥其他軍用ニ供スベキ要具ニシテ、該軍艦ノ勢力ヲ増加セシムベキモノヲ賣與スルハ許ス所ニ非ラザルナリ。凡テ船用ニ供スル物品ハ固ヨリ必ラズ我稅關ヲ經由セザルヲ得ザルガ故ニ、苟モ法ニ違ヒ交戰國軍艦ノ勢力ヲ増加スル者アレバ、稅關官吏ニ於テ之ヲ防遏スルコトヲ得ベク、且ツ其船舶ニ供給スル物料及ビ石炭ノ量ヲ制限スルコトヲ得ベキナリ。

局外中立ノ規則第六條ニ就テハ別ニ解釋ヲ要セズ。惟我版圖内ヨリ交戰國ニ對シ進征ノ軍ヲ發遣スルヲ許サズ。又交戰國ハ我版圖内ニ於テ戰ヒノ行爲ヲ顯ハシ、又ハ何人タリトモ交戰國ノ爲メニ戰ノ行爲アルヲ許サバル者ナリ、勅旨ニ所謂ル嚴正不偏ノ局外中立ヲ保持執行スルニハ、交戰國ノ一方ニ付與スル處ノ特權ハ亦同ジク之ヲ他ノ交戰國ニ付與シ、且ツ我局外中立ノ義務ヲ破壞セラレザルガ爲メ、適當ノ注意ヲ爲スヲ必要トス。

我が局外中立ヲ犯サントスル舉動アリト疑フベキ相當ノ事由アルニ於テハ、或ル場合ニ由リ



法律上ノ證據充分ナラザルコトアルベキモ、猶ホ直チニ其處分ヲ爲スヲ怠ル可カラズ。此目的ヲ達センガ爲メ要スル處ノ處分ハ、即チ其人ヲ逮捕シ、其船舶、貨物、材料及軍需ヲ拘拿スルニ在リ。然レドモ斯ク其人ヲ逮捕シ、其財産ヲ拘拿シタル上、若シ仍ホ局外中立規則ニ揭ゲタル處罰ヲ加ヘント欲スル場合ニ於テハ、必ラズ法律上ノ證明ヲ要スベシ。但嫌疑ニ付テノ處分ハ只其人ヲ逮捕シ其財産ヲ拘拿スルニ止ルノミ。

若シ外國人我局外中立ノ法律ヲ破ル所ノ企テアルニ於テハ、我ガ官吏ハ該外國人ノ屬スル處ノ國ノ官吏ニ請求シ、其場合ニ應ジ犯罪人ノ逮捕狀或ハ財産拘拿ノ令狀ヲ領シ、而シテ犯罪人ヲ逮捕シ、或ハ財産ヲ拘拿シ、直チニ之ヲ右ノ外國官吏ニ交付シ其裁判ヲ請求スベシ。

然レドモ犯罪人ノ屬スル國ノ官吏ニ通知スルタメ、該外國人ノ犯擧ヲ遂ゲシメ、或ハ犯罪人逃脫ノ機ヲ得セシムベキ場合ニ於テハ、我ガ官吏ハ直チニ其事情ニ應ジテ必要丈ケノ防制處分ヲナスヲ得ベシ。尤モ此處分ヲナスニ方リ、其人ヲ逮捕シ或ハ財産ヲ拘拿スルコトアルニ於テハ、直チニ其筋ノ外國官吏ニ通知シ、逮捕シタル人或ハ拘拿シタル財産ヲ該官吏ニ交付スベシ此等ノ事アルニ於テハ外國官吏ヲシテ必ズ勅旨及ビ規則ヲ以テ外國人ノ犯罪ニ對スル處分ノ原則ト爲サシメンコトヲ主張シ、若シ外國官吏ニ於テ勅旨及ビ規則ニ據リ處分スルヲ拒ミ、又ハ怠ルニ於テハ、直チニ其旨ヲ外務卿ニ具狀シ政府ヲシテ其事情ニ應ジテ至當ノ處置ヲ爲スヲ得

セシムベシ。

我ガ臣民ニシテ兩交戰國ノ使用若クハ使役ノ爲メ、士官、兵卒、書信、武器、彈藥、軍需其他戰時禁制品ト知ラレタル物品ヲ大洋ニ於テ運輸スル者、又ハ正當ニ定設シアル有効ノ封効ノ封港ヲ破ラントスル者ハ、其船舶或諸品等捕拿沒收ノ危険ヲ免レザルベシ。但其ノ捕拿沒收ヲ被ルハ現行犯ニシテ、即チ其航海ノ目的トスル地ニ到着スル迄ノ間ニ限レルモノトス。

抑モ千八百五十六年ノ巴里議會ノ宣告ニ據ルニ、

- 第一 巡洋艦ヲ以テ敵船ヲ捕畧スル事ハ向後永ク廢棄サレタリ。
- 第二 局外中立國ノ國旗ハ戰時禁制品ヲ除クノ外渾テ敵國ノ諸物貨ヲ保庇ス。
- 第三 局外中立國ノ諸物貨ハ戰時禁制品ヲ除クノ外敵國ノ旗下ニ在ルモ之ヲ奪掠ス可カラズ
- 第四 港市ノ封鎖ヲ遵守セシムルニハ、必ラズ實力有効ナランコトヲ要ス。即チ其ノ海岸ニ進入スルヲ禦グニ足ルベキ兵力ヲ以テ之ヲ保守スルコト是ナリ。

此ノ宣告ハ現ニ之ヲ承諾シ或ハ將來之ヲ承諾ス可キ諸國ヲ除クノ外ハ之ヲ遵守スベキノ義務ナシト云フ明文アリト雖モ、蓋シ今回ノ交戰兩國亦タ應サニ巴里宣告ヲ遵據スルヲ公告スベシト信ジ、且ツ冀望スルニ依リ、我政府ハ今回ノ役ニ於テ交戰國ノ志意果シテ此宣告ニ遵據スルニ在ルヤ否ヤヲ速ニ審定シ、其ノ事情ニ由リテハ更ニ追加ノ訓令ヲ發スルコトアルベシ。故ニ右



訓令未ダ發セザル迄ノ間、我臣民ハ其物貨ヲ交戰國ノ旗下ニ委托スルハ得策ニアラズ。  
所謂戰時禁制ノ物貨ト稱スルモノハ如左。

- 第一 武器、彈藥、兵船、其他都テ直接ニ軍用ニ供スベキ諸物品即チ小銃、大砲、砲彈、火藥、水雷火器、銃彈、砲彈、爆彈等及ビ專ラ武器彈藥ノ製造ニ使用スベキ物はレナリ。
- 第二 都テ武器機械、彈藥竝ニ兵艦ノ製造ノ爲メニ使用セント欲スル各物料及商品即チ諸金屬、船用蒸氣機、硝石、硫黃、布帆、材木、鋏錨ノ類是ナリ。
- 第三 馬ハ之ヲ交戰國ノ軍用ニ充テントスルトキ、食物ハ之ヲ運送シテ鎖港圍城ニ致ストキ、又食物、石炭物品及ビ供給物等直チニ交戰國ノ陸軍海軍ノ用ニ供セントスルトキハ則チ禁制品ト成ルナリ。

此外都テノ戰時禁制品、又ハ或ル事情ニ因テ禁制品ト爲ルベキモノハ今マ茲ニ逐一枚擧スルコトヲ得ズ。然レドモ若シ我臣民ガ其貨物沒收ノ爲メニ損害ヲ蒙ムルコトアルモ是レ躬カラ好デ禁制品ノ商業ニ從事スルノ致ス所ニシテ決シテ其禁制品タルヲ知ラザルモノト見做サズ。

我ガ臣民ハ兩交戰國ノ各港ニ於テ、其未ダ現ニ有効ノ封鎖ヲ受ケザル間ハ、來往通商スルノ權利ヲ有ス。而シテ正當ニ封鎖セラレタル後ト雖モ、其時未ダ現實ノ報知ヲ受ケザルカ、或ハ未ダ推測ノ報知ヲ有セザル船舶ハ、其港ノ近傍ニ到着スルトモ沒收セラル、コト無カル可シ、

然レドモ一旦封鎖ノ警告ヲ受ケタル後ハ、其無報知ナルノ故ヲ以テ強テ此圍線ヲ通行セントスルコトヲ得ズ。所謂推測ノ報知トハ、凡ソ封鎖シタル港津ニ入ラントスル船舶アランニ、縱令其封鎖ニ就テハ未ダ現實ノ報知ヲ受ケザルトモ、其四邊ノ情勢ヨリシテ其鎖港シ有ルヲ知レル者ト推測セラルベキ場合ヲ云フナリ。例ヘバ交戰國ノ一方、設シ他交戰國ノ某港ヲ封鎖シ、其事ヲ世ニ宣告シタル後チ相當ノ時日ヲ經過スルニ於テハ、則チ我ガ臣民ニ於テ該港封鎖ノ存立ヲ知了セルモノト推測セラル可シ。

又封鎖シタル港ノ入り口ヲ徘徊スル船舶ハ其拘拿ヲ免カレザル可ク、而シテ其意若シ此圍線ヲ衝斷セント欲スルニ在ルノ事實判然タルニ於テハ其船舶沒收セラルベシ。

日本船舶ニシテ交戰國ノ某港ニ滯在中若シ該港ノ封鎖ヲ受クルニ會セバ、其ノ時迄ニ積載シタル諸荷物ヲ以テ右港ヲ出發シ去ルノ權利アル可シ。然レドモ此ノ場合ニ會スル船舶右港ノ封鎖後ニ積載シタル荷物ヲ運ビ去ラント企ルニ於テハ、其拘拿沒收ヲ免レ難カル可シ。

我政府ハ今回ノ戰爭中、大ニ各地方官ノ注意ト勉勵トニ頼ルニ非ザレバ、我責任ヲ全フスルコトヲ得ザルベシ。

蓋シ交戰國ガ我國ノ港口海濱、海上及ビ島嶼ヲ以テ戰鬪用意ノ根據ト做シ、交戰國ノ利用ニ供セント謀ルコトアルハ自然ノ勢ナリ。故ニ此等ノ行爲ヲ防止シ、我局外中立ノ大義ヲ維持ス



ルハ我臣民ノ目的ト爲ス可キ所ナリ。是ノ目的ヲ達セント欲セバ、嚴正ニ局外中立勅旨及規則及本紙訓令ニ掲グル處ノ主旨ヲ奉ジ、能ク之ヲ執行スルニアルノミ。

兩交戰國ノ軍艦ヲ我管海ニ於テ修繕ヲ加ユルコトヲ許スハ單ニ本艦ヲシテ航海ニ堪ヘシムルガ爲メニ必要ナル分ヲ以テ限リト爲ス。決シテ此修繕ヲ其武器軍裝ニ及ボスコトヲ許サズ。又其軍艦ニ供給スル物料ハ其ノ自國管轄ノ最近港ニ到達スルニ足ルヲ度トス。決シテ此量ヲ超過ス可ラズ。

是等訓令中ニ所謂其ノ自國ノ最近港トハ、凡我港口ニ於テ石炭或ハ食料ヲ給與スル交戰國ノ軍艦ガ右港口ヲ發シ、通常ノ航路ニ由リ進行スルニ於テ最モ近接ナル其本國ノ港津ヲ云フナリ。彼ノ交戰國軍艦ニ許シアル所ノ定量ヲ超過セザルノ石炭或ハ食料ヲ得ザラシメンガ爲メ、且ツ太政大臣ノ達内ニ定メアル期限内ニ於テ、我諸方ノ港口ニ移轉シ再三其ノ需用品ヲ得ルコトナカラシメンガ爲メ、地方官ハ其管轄内ニ交戰國軍艦ノ到着スル毎ニ直チニ電信ヲ以テ其艦名艦長ノ姓名又ハ事實ヲ外務卿ニ申報スルヲ必要トス。而シテ外務卿許可ノ指令ヲ得タル後、該軍艦ニ石炭及ビ食料ノ積入ヲ聽ルスベシ。又諸開港場ニ在ル我海軍司令官ハ、局外中立規則ノ條款ニ據リ交戰國ノ船舶及ビ軍艦ノ出帆順序ヲ整理シ、且ツ規則中凡テ交戰國軍艦ニ關スル諸條款ハ果シテ其遵奉スル處タルヤ否ヤヲ監視スベキモノトス。

太政大臣達ノ内ニ特別ノ許可トアルハ、交戰國ノ兵船ニシテ一たび石炭ノ供給ヲ得タルモノ暴風雨ノ爲メニ其供給ヲ得タル日ヨリ未ダ三ヶ月ヲ經過セザル前、我港口ニ吹キ入レラレ、再ビ其自國管轄ノ最近港ニ達スル迄ノ石炭ノ供給ヲ要スルニ當リテハ地方官ハ直チニ其旨ヲ外務卿ニ報告シ若シ事實至當ト認ムルニ於テハ、再ビ該兵船ヘ右石炭ヲ供給スベキ特別ノ許可ヲ與ユルコトアルヲ云フナリ。

又右達ノ内ニ出發ヲ僞リトアルハ、一方交戰國ノ船舶同港内ニ碇泊スル處ノ他一方交戰國ノ軍艦ヲ成ルベク長ク停留セシメンタメ、陽ニ出發シ、二十四時間ヲ經過セザル前ニ再ビ同港ニ還リ仍ヲ先發ノ權ヲ要求シ、際限ナク他一方交戰國軍艦ノ出發ヲ停留セントスル場合ヲ云フ。此場合ニ於テハ他一方交戰國軍艦ハ出發ヲ僞リタル船舶二十四時間内ニ還港スルニ拘ラズ、初メ出發ノ時ヨリ右時間ヲ經過シタルニ於テハ直チニ出發スルヲ得ベシ。又タ數艘引續キ出發トアルハ一方交戰國ノ船舶數艘二四十時間ヲ經過セザル内交々出發シ、最終出發ノ後チ二十四時間ヲ經過スル迄同港ニ碇泊スル他一方交戰國ノ軍艦ヲ停留セントスル場合ヲ云フ。此場合ニ於テハ數隻中第一次出發ノ後チ二十四時間以上、他一方交戰國軍艦ノ出發ヲ抑留スベカラザルヲ云ナリ。我臣民ガ所有スル船舶若シ交戰國軍艦ノ警衛ヲ以テ航行スルカ、或ハ簿書シツプスベームヲ破棄セント企テ、若クハ詐僞ノ簿書ヲ携帶シ、又ハ交戰國軍艦ヨリ其船中ニ來リ搜查スルコトヲ拒ミ、



或ハ之ヲ逃避セント企ルトキハ、則チ其船舶ハ拘拿ヲ免レザル可ク、或ハ沒收ヲ蒙ルコトアルベシ。此旨宜シク預ジメ我臣民ヘ心得ノ爲告諭スベキ者トス。

大海ニ於テ局外中立ノ商船ニ來リ、戰時禁制品ノ有無ヲ搜索スルハ交戰國ノ權利タル固ヨリ萬國公法ノ認可スル所ナリ。而シテ其來リ搜索スルヲ避ケンコトヲ試ムル所ノ船ハ、自カラ嫌疑ヲ免ル、ヲ得ズ。故ニ我日本ノ諸船舶ハ我管轄外ニ航海スルニ當リ、穩便ニ右交戰國ノ權利ヲ承認スベシ。

我政府ハ能ク局外義務ヲ盡シ過テ無カラシメンガ爲メ、横濱神戸及ビ長崎ノ三港ニ於テ陸海軍ノ官吏及ビ縣令、税關長、檢事、警察部長ヨリ成立ツ所ノ事務局ヲ設ケ、其地方ニ於テ此ノ局外中立ニ關スル事務ヲ處辨セシムルニ決セリ。且ツ又右各局ニハ其ノ補員トシテ外國人二名ヅ、ヲ置キ、其一人ニハ該局職務施行上ニ付海軍上ノ事務ヲ措辨セシメ、他ノ一人ニハ凡テ法律上ノ事件ニ付同様ノ職務ヲ盡サシムベシ、故ニ各局ニ於テハ必ラズ右外國人ト協議ノ上、諸事處分スルコトヲ要ス。都テ緊要ノ事件及ビ該局員右補員ノ外國人ト意見ヲ異ニスル時、及ビ殊更ニ我政府ノ施行スル局外中立義務ニ係リ、諸外國人ノ利益竝ニ責務ニ關スル事ハ、該局ニ於テ總テ外務卿ヘ伺出許可ヲ得テ之ヲ處置スベシ。然ラザレバ我政府ノ許可セザル處置アリテ、我政府ニ其責ヲ負擔セシムルコトアルモ料リ難シ。凡テ交戰國軍艦其他ノ船舶ニシテ、食料及ビ

石炭ヲ需要スルモノハ税關長ニ願出ヅベキニ依リ、税關長ハ交戰國軍艦等ノ司令官ヨリ右請求ヲ受ケ取りタルトキハ、遲延ナク事務局ノ會議ヲ開キ本紙訓令ノ主意ニ依リ處分スベシ。

局外中立ノ勅旨ニ屬スル所ノ規則ニ於テハ、必ラズ避ク可カラザル場合ヲ除クノ外ハ、戰時ノ捕物ヲ我管轄ノ港口ニ齎來スルコトヲ禁ズ。故ニ我諸官吏ハ此個條ヲ破ラル、事ヲ防止スル爲メニ深ク留心注意ス可シ。而シテ之ヲ犯シタル者アル場合ニ於テハ直ニ總テ其事ヲ取糺シ、之ヲ外務卿ニ報告スベシ。

若シ又兩交戰國ノ軍艦我管轄ノ海上即チ港口海濱海上又ハ我國ノ本陸若クハ諸島ノ海岸ヨリ海上凡三海里ノ距離以內ニ於テ捕物トシテ捕獲シ、以テ我國ノ局外中立ヲ破ルモノアラバ我諸官吏ニ於テ務メテ其ノ事實ヲ詳細ニ取糺シ、而シテ直ニ其成果ヲ外務卿ニ報告スベシ。



秘書類纂 外交篇 上卷

人名索引

(イ)

- 伊藤博文 一、八、六、七、九、九四、九六、二七、  
一四、一八〇、二四九、三二、三九七、三九八、四七、  
五七、五八、六六、六六、六八、六八、六八、  
井上馨 六、七、九、一八、一八、三三、  
三三、四七、四七、四七、六六、六六、六六、  
石井省一郎 二五、二六、二七、  
井上毅 二二、三九、五五、五二、  
稻垣滿次郎 三四、三六、  
イリヨツト 三九、三九、  
井田讓 三三、

索引

- 稻垣示 四六、  
石原半右衛門 四六、  
飯村丈三郎 四六、  
岩倉具視 四六、五四、五五、

(ロ)

- ロエスレル 一三、一九、四七、  
ローラン、ヂャクミーンズ 一四、一五、一五、  
ローラン 一六、一七、一七、二八、  
ロークワン 一七、一七、  
ロエシネ 三〇、  
ロード・ロスベリ 五七、

(ハ)

- ハリス 一七、  
バトルノストロ 一四、一五、一五、一六、一六、五五、五二、  
パーレル 一七、  
パークレイ 一七、二八、  
ハートマン 一七、



ハールバジャー 一七三、一七九、  
 ハレツク 一九三、五三三、  
 バスカラウオングシー 二六三、  
 原弘三 四三六、  
 ハール 四六一、  
 蜂須賀茂韶 六三三、六三三、  
 鳩山和夫 六〇七、

(ニ)

ニユマン 二九五、  
 西成度 二四〇、  
 仁禮景範 六三三、六三六、  
 西村茂樹 五七七、

(ホ)

ホー ル 一三三、一三三、一六六、一九三、五三三、五三六、  
 ホイートン 五七七、五八六、  
 ホランド 一三二、一九三、  
 ホーリング 一七三、一七三、一七六、  
 二五六、

ポアソナード 三九三、三九四、三九七、三九八、五三三、五三六、  
 ホウエトン 六二二、六二七、六三〇、  
 ホート・フォル 五三三、  
 五三七、

(ヘ)

ヘフテル 一三二、一九三、五三三、五三六、  
 ペレルス 一五〇、一六一、一七六、

(ト)

徳大寺實則 九五、一五〇、  
 トラベルスツウキス 一四六、一九九、一六二、一七六、一七七、  
 一八七、一七九  
 トールスカンボス 一四六、一五二、  
 トラブラ 一六一、  
 徳川家康 一七九、  
 徳川慶喜 五五九、五六四、  
 ドバル 二八三、  
 ドマルチツ 二八三、  
 ドマルタレス 二八三、

トロスヲ 五〇三、  
 トレールハール 五三三、  
 トレンチ 六四二、六四三、六四四、六四六、  
 トリク 六五〇、

(チ)

仲哀天皇 五六一、  
 千葉胤昌 四二六、

(リ)

リビエー 一七三、  
 リー 二八三、二八四、  
 リオンカン 二八三、  
 李鴻章 六四七、

(ル)

ルノール 一四六、一五二、一六一、二八三、  
 ルキ十六世 五〇一、五〇四、  
 ルードウィック十二世 五三四、

(オ)

大隈重信 七四、七六、七六、九〇、九四、九五、九七、  
 九八、九九、一〇〇、三三三、四〇〇、四四七、四五八、  
 一七四、  
 オリバート 二八四、  
 ヲレリ 四三六、  
 岡崎運兵衛 五九一、五九四、五九五、六〇四、  
 尾崎三良

(ワ)

ワエヒテルウイケフルト 五三七、  
 ワイス 一七四、  
 ワツテル 五三三、五三四、  
 若原觀瑞 四三六、  
 和田彦二郎 四三六、  
 ワシントン 五三三、

(カ)

金子堅太郎 一四四、一四六、一七三、一八〇、二八三、  
 カラテヲドリ・エフアンチ 一四六、一五二、  
 カテラン 一七三、一七九、  
 カブール 二七七、



柏田 盛文 四三六、  
風間與一郎 四三六、

(タ)

谷 干城 一〇五、一〇六、二四、二六、二八、三四、  
三三、三六、三七、三九、四〇、  
ダビド、ダットレ、フィールド 一四六、一五二、  
玉田金三郎 四六六、

(レ)

レ ヤー 一四八、二七、三四、  
レ イ 一七三、  
レイナール 一七五、  
レセプス 五四四、  
黎 庶 昌 六三三、六三七、  
レス ビー 六五二、六五三、

(リ)

宗 重 望 五三三、  
ソルスベリー 三〇七、三〇九、三一一、

村松龜一郎 四六六、

(ウ)

鵜飼 節郎 一五五、  
ヴイクトリア女皇 五〇六、  
植田理太郎 四三六、  
鵜飼郁二郎 四三六、  
ウエブスター 四三六、  
ウオルター 四四〇、  
字川盛三郎 六二〇、六二二、  
ウキリス 六三九、六四一、六四四、六四五、

(ク)

黒田 清隆 九〇、九三、九四、九五、  
クレイン 一七三、  
クラレンドン 二〇七、  
グランヴヒル 二〇八、五五五、五五五、  
クロ マタ 二六〇、二六二、二六三、  
グラツソン 二八三、  
グラント 三六一、

索引

索引

(ツ)

都筑 馨六 三〇一、

(ネ)

ネツケル 五〇三、

(ナ)

鍋島直大 三三三、  
長岡護美 三三三、  
長崎省吾 六〇五、六〇六、

(ラ)

ラ ブ ラ 一四六、一五二、一七六、  
ラ ー デ 一七三、  
ラ マ ツ シ 二八三、  
ラ バ ント 三〇四、  
ラ ート ゲ ン 三六九、  
ラ イ ス 四三四、

(ム)

グナイスト 三〇四、  
栗塚 省吾 三九八、  
クリューベル 五二六、五二七、  
クリスチャン 五四三、  
ク ール ベー 六三三、六三三、六三三、  
ク ーゼ ン 五〇五、

(ヤ)

柳原 前光 三三三、

(マ)

松方 正義 七九、  
松平 慶永 五六一、  
マルタン ス 一四三、一四六、一五〇、一五三、一五九、一七五、  
マームベレー 二〇七、  
マル チツ 二八三、  
マキシミリヤン 五三四、  
町 田 六五三、

(ケ)



ゲーマイエル 三〇四、

(フ)

ブランケット 四二、一六七、  
 ブルンチユリー 一三二、一九三、二八一、五二六、五三二、五三三、  
 ブユルメリンク 五三六、  
 ブレ ルス 一四五、一五〇、一五九、一六〇、一六一、  
 フェルグユソン 一四五、一四七、一五〇、一五五、一五九、一六一、  
 フロージロー 五三七、  
 フレシエヤー 一四五、一四七、一五〇、一五三、一五九、一六一、  
 ブル ーサ 一七三、一七五、  
 フヒヨレイ 一七三、一七九、  
 フオデレイ 一七三、  
 ブザ チー 一七三、  
 ファーギユーツン 一七三、  
 ブロンチー 五三七、  
 ファーガソン 一七三、

フヒ モア 一九三、一九七、  
 ファツテル 一九七、  
 プラ ズン 二九五、  
 ブルンノウ 二〇六、  
 プロケスオステン 二九六、三〇〇、  
 プロエブス 三〇四、  
 プロ ツク 四九七、五〇〇、五〇五、  
 プロジエフオデレ 五二六、五二七、  
 フェルグソン 五三九、  
 古莊 嘉門 四二六、  
 藤澤幾之輔 四二六、  
 ブラ ツク 四六、  
 フェリー 六三三、六三三、六四七、  
 ブライイス 四七七、  
 フヒオール 五三六、五三七、

(コ)

後藤象二郎 八〇、八九、九〇、九三、九四、九六、九七、  
 ゴルチャコフ 一〇四、  
 二〇六、

コンドホーフ 二四三、  
 小松宮彰仁親王 二四九、  
 香月 恕經 四二六、  
 神鞭 知常 四二六、

(エ)

榎本 武揚 六七、七四、七六、七七、七九、八〇、三三九、  
 エングルハート 一七六、  
 エーマイエル 三〇四、

(テ)

寺島 宗則 一、三、五、六、七、六七、七一、七三、  
 七三、七四、三三三、三四、三九、三〇、三三三、  
 三三三、四三七、  
 デヂヤダン 一七三、  
 デーヴオングシイ 二四三、  
 デーシヨ 二六三、  
 デニ ソン 三三三、三四、六〇七、

(ア)

青木 周藏 四四七、

アンゼラール 一五〇、一六一、二八三、二八四、  
 アンドレウエイヌ 二八三、  
 アン ソン 四七五、  
 アツ セル 二八二、二八三、  
 アルベツク 二八三、  
 アポストリツク 二九五、  
 新井 章吾 四二六、  
 安部井磐根 四二六、  
 安藤 太郎 六四六、六四七、

(サ)

三條 實美 八五、六三三、六四三、  
 サ ト 二五〇、  
 サフペツトバシヤ 二九六、三〇〇、  
 鮫 島 三三二、  
 佐々 友房 四二六、  
 坂本 則美 四二六、  
 坂田 丈平 四二六、



坂本 規貞 四六、  
佐々木善右衛門 四六、  
澤 宣 嘉 四九、四五〇、  
西郷 從道 六一〇、

(キ)

木下 莊平 四六、

(メ)

メイ リー 二六三、

(ミ)

宮地 茂春 二五、  
源 頼 朝 一七、  
宮島誠一郎 六五、六六、

(シ)

神武 天皇 一七、  
ジャクミン 二五、二五三、二五五、二六五、二七〇、二七一、  
シツ エロ 二七四、  
五三六、

清水文二郎 四六、  
シエンキエウキツチ 六三、

(ヒ)

ビゴ ット 一四三、一四四、四七九、  
ビ レ ル 一七三、  
ヒ ッ ク ス 二六二、二六三、  
ビーコンスフィールド 二七七、  
ヒイ アド 二九二、二九四、  
ビス マーク 三〇六、  
ビネロフェラ 五七、  
ヒリ モール 五三〇、五四二、  
ヒリ ッ プ 五四四、  
ピーター大帝 五九、

(モ)

モワニエー 一七三、一七五、  
モルトルーク 一七三、  
森 有 禮 三〇九、  
モルリソン 三二五、

モンテスキュー 五〇、  
森 隆 介 四六、  
森本 藤吉 四六、  
元 田 肇 四六、  
モ ス 四四、

(セ)

ゼリ・ネツク 二六四、

(ス)

崇神 天皇 五六、  
推古 天皇 一七九、  
鈴木 重遠 四六、



昭和九年六月廿九日印  
昭和九年七月四日發行



秘類纂  
外 交 類  
不 許 複 製

定價七圓

校訂者 平塚篤

發行者 西村豊吉  
東京市麴町區九段四丁目八番地

印刷者 小林美三  
東京市神田區神保町三丁目二三番地

發行所

東京市麴町區九段四丁目八番地  
叢文閣內  
秘書類纂刊行會  
振替東京四二八八九 電話九段二五六八番

製本者・柏谷秀二郎











